千葉県教育振興財団調査報告第743集

四街道市出口･鐘塚(2)･(3)･(4)遺跡

― 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XⅧ ―

平成27年10月

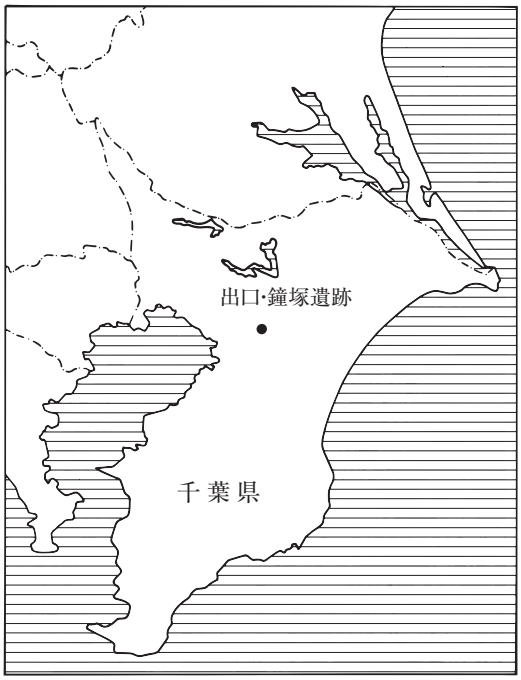
独立行政法人　都 市 再 生 機 構

公益財団法人　千葉県教育振興財団

四街道市出口・鐘塚(2)・(3)・(4)遺跡

よつかいどうしでぐちかねづか

― 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XⅧ ―



序　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第743集として、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市出口・鐘塚遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、後期旧石器時代の遺物集中地点が７か所発見されました。そこからは、全国的に見ても発見例の少ない有溝砥石が出土し、当地方における旧石器時代の様相を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際して御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成27年10月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理　事　長　　堀　田　弘　文

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市長岡字鐘塚 209-1 ほかに所在する出口･鐘塚（２）･（３）･（４）遺跡（遺跡コード 228-009（２）、同（３）、同（４））である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は、上席文化財主事田村　隆が担当した。

6　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　　1/25,000 地形図（佐倉）（NI-54-19-14-2）

第４図　独立行政法人都市再生機構による物井地区現況図

7　本書で使用した図面の方位は全て座標北である。測量値については日本測地系を使用した。

8　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の機関の御指導・御協力を得た。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、四街道市教育委員会

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　調査の経緯と概要…… 1
　　２　調査の方法…… 1
　　３　標準土層…… 3
　第２節　遺跡の位置と環境…… 4
第２章　後期旧石器時代…… 5
　第１節　はじめに…… 5
　第２節　各集中の状況と出土遺物…… 7
　　１　集中１…… 7
　　２　集中２…… 12
　　３　集中３…… 13
　　４　集中４…… 15
　　５　集中５…… 15
　　６　集中６…… 20
　　７　集中７…… 23
第３章　縄文時代の遺構と出土遺物…… 24
　　１　SK-001 …… 24
　　２　縄文時代の遺物…… 24
第４章　まとめ…… 26

表目次

第１表　集中１石器属性表…… 9
第２表　集中２石器属性表…… 12
第３表　集中３石器属性表…… 14
第４表　集中４石器属性表…… 15
第５表　集中５石器属性表…… 18
第６表　集中６石器属性表…… 22
第７表　集中７石器属性表…… 23

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の地形…… 2
第２図　標準土層…… 3
第３図　出口・鐘塚（２）・（３）・（４）遺跡全体図…… 6
第４図　出口・鐘塚遺跡調査範囲…… 8
第５図　集中１遺物分布図…… 9
第６図　集中１の遺物（１）…… 10
第７図　集中１の遺物（２）…… 11
第８図　集中２遺物分布図…… 12
第９図　集中２・集中３・集中４の遺物…… 13
第10図　集中３遺物分布状況…… 14
第11図　集中４遺物分布図…… 15
第12図　集中５遺物分布図…… 16
第13図　集中５の遺物（１）…… 17
第14図　集中５の遺物（２）…… 18
第15図　集中６遺物分布図…… 19
第16図　集中６の遺物…… 21
第17図　集中７遺物分布図…… 22
第18図　集中７の遺物…… 23
第19図　縄文時代の遺構と縄文土器…… 24
第20図　縄文時代遺物包含層出土石器…… 25
第21図　剥片製小型石器の系統…… 28

図版目次

図版１　集中1遺物出土状況、集中１有溝砥石出土状況（１）、集中１有溝砥石出土状況（２）、集中２遺物出土状況、集中３・集中５遺物出土状況、集中６遺物出土状況、SK-001
図版２　後期旧石器時代集中１、後期旧石器時代集中２、後期旧石器時代集中３、後期旧石器時代集中４、後期旧石器時代集中５出土遺物
図版３　後期旧石器時代集中５、後期旧石器時代集中６、後期旧石器時代集中７出土遺物、縄文時代遺物包含層出土遺物
図版４　後期旧石器時代集中１有溝砥石、縄文土器

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と概要

独立行政法人都市再生機構は、宅地の安定的な供給を目指し、JR 総武本線物井駅と、既存の千代田団地との間に広がる広大な地域を対象として、物井地区土地区画整理事業を実施している。その面積は宅地、公園・緑地など 95.7 ヘクタールに及ぶ。区画整理事業地内には多くの埋蔵文化財包蔵地があるため、昭和 59 年以降、公益財団法人千葉県文化財センターが逐次発掘調査を実施してきた。

今回報告する出口・鐘塚遺跡の発掘調査及び整理作業の担当職員は以下のとおりである。

平成 20 年度（出口・鐘塚（２）遺跡）

期間　平成 21 年２月２日～平成 21 年２月 13 日

組織　調査研究部長　大原正義、北部調査事務所長　豊田佳伸、上席研究員　土屋潤一郎

内容　確認調査　211㎡

平成 21 年度（出口・鐘塚（３）遺跡）

期間　平成 21 年５月 21 日～平成 21 年６月 30 日

組織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄、上席研究員　土屋潤一郎

内容　確認調査　1,274㎡、本調査　下層　77㎡

平成 22 年度（出口・鐘塚（４）遺跡）

期間　平成 22 年８月２日～平成 22 年８月 30 日

組織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄、上席研究員　田井知二

内容　確認 566㎡、本調査　上層　40㎡、下層　89㎡

平成 24 年度

期間　平成 24 年 12 月１日～平成 24 年 12 月 28 日

組織　調査研究部長　関口達彦、整理課長　高田　博、上席文化財主事　小高春雄

内容　水洗・注記～接合の一部

平成 26 年度

期間　平成 26 年 12 月１日～平成 27 年３月 31 日

組織　調査研究部長　伊藤智樹、整理課長　今泉　潔、上席文化財主事　田村　隆

内容　接合の一部～原稿執筆・編集

平成 27 年度

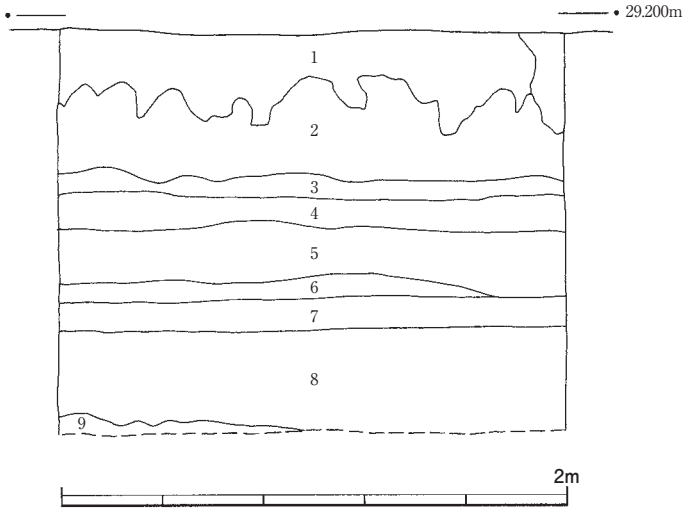
期間　平成 27 年４月１日～平成 28 年３月 31 日

内容　報告書刊行

2　調査の方法

調査に当たっては、公共座標に準拠した 50m 方眼を基本とするグリッド・システムを採用した。一辺 50m の単位区画は、南北方向のアルファベット行と東西方向の数字列を組み合わせることによって識別

第１図　遺跡の位置（黒丸）と周辺の地形（網は物井地区範囲）



第２図　標準土層

されるが、今回報告するエリアは、Ｔ行８列及び９列、Ｕ行８列及び９列によってほぼ覆われる（第３図）。これは物井地区全域の基本方眼網である。基本グリッドの内部は、一辺５ｍの小グリッドによって100分割される。小グリッドの呼称は、大グリッド西北コーナーを起点00とし、東に01、02、03等と進む。また、南へは10、20、30等と進み、すべての小グリッドに00～99という二桁の番号が割り振られる。小グリッドはこれに基本グリッド名を冠し、例えば、9U-00のように記号化され、調査段階の記録化の基本単位となる。

発掘調査に当たっては、調査地がいずれも現道に接する宅地であったため、基本グリッドに沿った上層確認調査トレンチの設定は行わず、敷地の長軸に沿ったやや変則的なトレンチ配置が採用された。下層確認のための試掘坑は、原則としてトレンチ中央に設定したが、一部では現地の条件にあわせ、変則的な設定となっている。確認調査の対象面積比率は上層10%、下層４％を目安とした。

３　標準土層

遺跡の標準土層として、8T-99の土層をあげておく（第２図）。ここでは完新世の土壌層はすでに失われているが、立川ローム層全層準を留めていた。

１層　軟質の土壌層である。渡辺ら（渡辺ほか1992）のⅢ層に相当する。

２層　スコリア質の硬い土壌層である。１層との境界は波状帯となる。渡辺らのⅣ層からⅤ層に相当するが、非常に薄く、対応関係に苦慮する。

３層　姶良Tn火山灰層を挟む硬質の土壌層である。渡辺らのⅥ層に相当する。

４層　第２黒色帯の上部層である。姶良Tn火山灰の粒子が混入する。渡辺らのⅦ層に相当する。

５層　第２黒色帯中部層で、赤色スコリアなど有色スコリア粒を含む。渡辺らのⅨａ層に相当する。

６層　第２黒色帯中部層であるが、明るい色調の部分である。渡辺らのⅨｂ層に相当する。

７層　第２黒色帯下部暗色部である。やはりスコリア質である。渡辺らのⅨｃ層に相当する。

８層　立川ローム層最下層である。渡辺らのⅩ層に相当する。渡辺らはこの層を３層に細分しているが、本地点では分層はできなかった。

９層　武蔵野ローム層のトップであるが、一部しか掘削されていない。

第２章の記述では、渡辺らの記号を踏襲する。ここでの分層は、隣接する昭和61年度調査区の土層区分と基本的に一致している。ただし、８層の細分に関しては否定的であった。８層を３区分する見解が標準とされているが、必ずしも一般的ではない。

第２節　遺跡の位置と環境

本遺跡の主要部分に関しては昭和61年度に調査され（この調査を出口・鐘塚（１）遺跡と仮称する)、すでに報告書が刊行されている（岡田 1999)。報告書では、遺跡の立地環境についても詳しく記述されているので、概要のみ記しておく。出口･鐘塚遺跡は印旛沼に注ぐ鹿島川と手繰川に挟まれる台地上にある。台地の標高は29m前後ある。遺跡中央部には鹿島川の支谷がほぼ南北に走り、豊富な遺物を出土した出口･鐘塚（１）遺跡第１調査区は、その湧水点を東西に分ける舌状台地上に位置する（第１図・第４図)。

今回報告する３地点（それぞれ出口・鐘塚（２)・(３)・(４）遺跡とする）は、この支谷と、更に東側に入り込む棒山・呼戸遺跡側の支谷とを画する尾根上にある。各地点は何れも小規模であり、出口・鐘塚（２）遺跡の規模が211㎡、同（３）が1,274㎡、同（４）が566㎡である（第３図・第４図)。

これまで出口・鐘塚遺跡からは20か所以上の遺物集中地点から2,807の遺物が回収されている。Ⅸ層中部を中心に多くの集中地点があり、該期の標準資料となっている。遺跡の北側には出口遺跡が接する。出口遺跡には29か所の遺物集中地点があり、967点の遺物が出土している（野口 2013)。これ以外にも物井地区では、御山遺跡（矢本 1994）や小屋ノ内遺跡（古内 2005）など、重要な後期旧石器時代の遺跡が調査されている。

一方、縄文時代以降の遺構、遺物の分布としては、出口・鐘塚（１）遺跡で、縄文時代の陥穴３基、性格不詳の土坑１基、古墳周溝１基、歴史時代の方形周溝遺構６基があり、他に近世の溝、穴、炭窯などが発見されている。出口・鐘塚（１）遺跡では、出口・鐘塚（４）遺跡の北側に接する部分で複数の溝が東西に掘削されていた。溝の底面は硬く踏み固められており、近世の道跡と考えられている。ウマの歯が採集されている。

引用・参考文献

岡田誠造　1999 『四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』（財）千葉県文化財センター

野口行雄　2013 『四街道市出口遺跡旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』（公財）千葉県教育振興財団

古内　茂　2005 『四街道市小屋ノ内遺跡（１）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』（財）千葉県文化財センター

矢本節朗　1994 『四街道市御山遺跡（１）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ第１分冊－』（財）千葉県文化財センター

渡辺修一ほか　1992 「下総台地における立川ローム層の層序区分」『研究連絡誌』（財）千葉県文化財センター　3-15頁

第２章　後期旧石器時代

第１節　はじめに

集中地点の記載に先だち、石器と石材の分類基準について触れておく。今回の調査によって出土した石器は、石核、剥片、石刃、有溝砥石の４種であった。その定義は以下の通りである。

１．石核　剥片生産と密接に関わる石器であるが、剥片は剥片一般なのではなく、ブランクであるという条件が付される。ブランクとは未加工のまま、あるいは細部加工を経て、加工具や厨房具、あるいは狩猟具として使用される有用剥片をいう。有用剥片は「目的的剥片」という狭い枠組みで理解することもできるが、生産された剥片の中から必要な属性をもった剥片が選択されることも多い。

石核には二種ある。一つは打面を設定し、そこから剥片を剥離する一般的な石核で、これを石核Ａとした。もう一つは、いわゆる両極石核である。楔形石器（ピエス・エスキェ）という呼称もある。これを石核Ｂとした。石核Ｂについては、剥片生産のための石核か、それとも楔形をした石器かという議論があるが、その機能はつくられたコンテクストに依存している。ある場合には小型剥片用の石核となり、ある場合にはさまざまな機能をもった石器として使われたと考えられる。両者を兼ねる場合も想定される。

２．剥片　上記石核と対応する。剥片は原礫面の有無、細かな刃こぼれの有無、細部加工の有無などから以下の通り細分する。

剥片Ａ　原礫風化面（酸化フロント）が観察されるもの

剥片Ｂ　原礫風化面（酸化フロント）が観察されないもの

剥片Ｃ　細かな連続的な刃こぼれの観察されるもの　類似する小剥離は、トランピング（ヒトや動物による踏みつけ）によっても生じるので注意を要する。

剥片Ｄ　企図的な連続剥離が確認されるもの　本遺跡の場合、剥離の多くはニブリング（日本語訳はないが、仮に啄打と訳しておく）によるものである。

剥片Ｅ　両極剥離による剥片であり、線状打面、打面に接する背面潰状剥離痕、平坦打瘤、密集する腹面のアンジュレーションなどから識別した。

３．石刃　一般的な定義に従うが、石刃生産の留意点は（田村 2015）で詳説した。

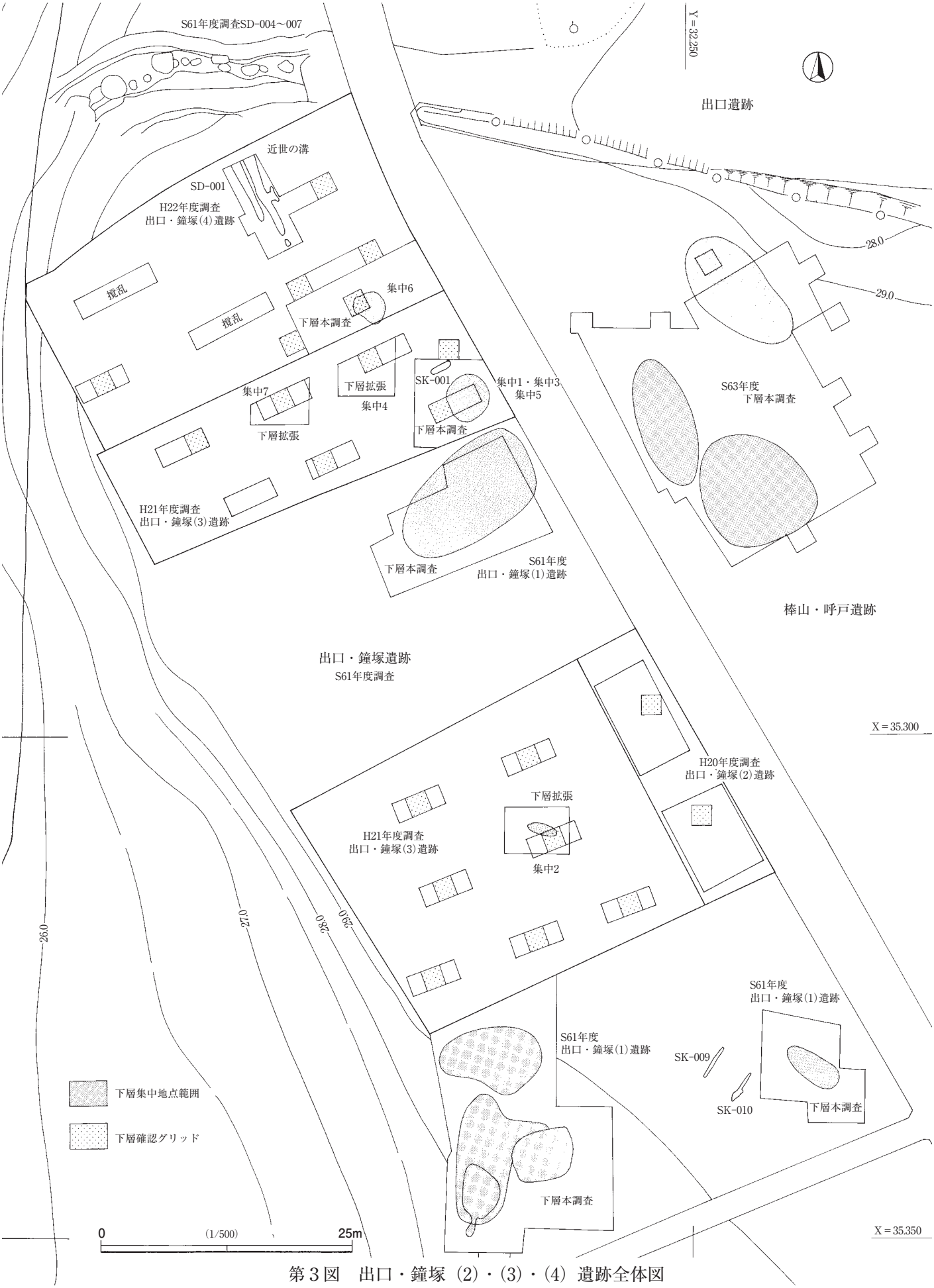
４．有溝砥石　幅広い溝をもつ砥石であり、第一報では、磨製石斧の刃部研磨用とされた（島立 1994）。

次に石材について分類根拠を示しておく。

１．珪質頁岩Ｙ　褐色～暗褐色の酸化フロントの発達した細粒緻密な塊状岩で、貝殻状断口が発達する。珪化した黒色頁岩である。これと類似する珪化泥岩・珪質頁岩は関東エリアには産出せず、脊梁山脈をこえた第三紀中新世の地層分布地域に点在している。直近で最も規模が大きい産出地は山形県米沢市南部矢子層であり、ここでは頁岩層が広く珪化し、大規模な珪質頁岩供給源となっている。新潟にも何か所か同種石材の産地はあるが、その産状は、いずれも凝灰岩層中の火砕泥岩である。添字Ｙは矢子層産を示す。

２．珪化泥岩Ｔ　第三紀中新世の珪化泥岩であり、産出層は高原山基盤岩である。房総半島の万田野・長浜層に扁平な円礫として多く含まれる。添字Ｔは高原山産を示す。

３．珪質頁岩Ｈ　房総半島保田層産群の珪質頁岩である。灰色をしており、濃色の斑文が認められる。



第３図　出口・鐘塚（2）・（3）・（4）遺跡全体図

印旛沼以南の地域で大量に消費された石材であり、南房総市三原川上流部に岩体が露出する。添字Ｈは保田層群産を示す。

４．チャート　中生代生物岩である。関東山地と足尾山地、並びに八溝山地に広大な岩体が広がる。房総半島の万田野・長浜層にも多く含まれている。

５．砂岩　ここでは、一般的な砂岩ではなく、上総層群など房総半島の第三紀～第四紀の地層に含まれる軟質砂岩を指示する。黄褐色をした均質な塊状岩であるが、石英など粒子間の結合はきわめて脆弱で、容易に分離し、粒状となる。石斧刃部の研磨をおこなう場合、分離した硬質の石材構成粒子が研磨剤の役割を果たした可能性がある。しかし、消耗は顕著であることから、数面に及ぶ研磨面がつくられたのであろう。

６．黒色安山岩　集中２にある無斑晶の例は万田野・長浜層産の円礫とみられる。集中６の例はこれとは異なり、酸化フロントが未発達の石材で、産地は複数あるが特定できない。

７．ホルンフェルス　万田野層中に多量に含まれる中生代堆積岩起源の変成岩である。

８．碧玉　産地不詳である。同種碧玉産地は東関東各地に点在する。万田野・長浜層にも少なからず包含されている。

９．黒曜石　集中５の例は、透明で良質な石材である。原産地分析は行っていないが、筑摩高地産であろう。

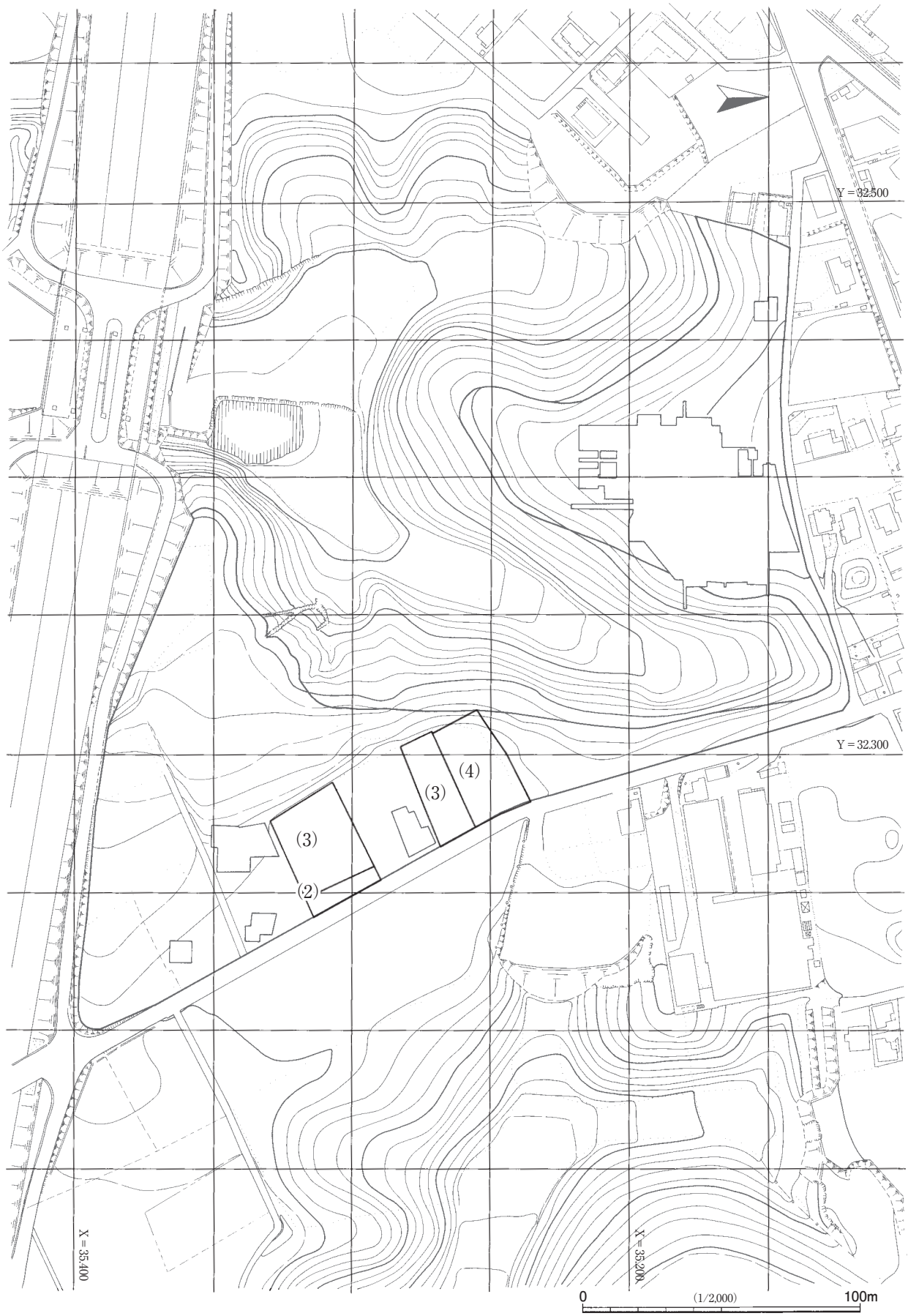
第２節　各集中の状況と出土遺物

１　集中１

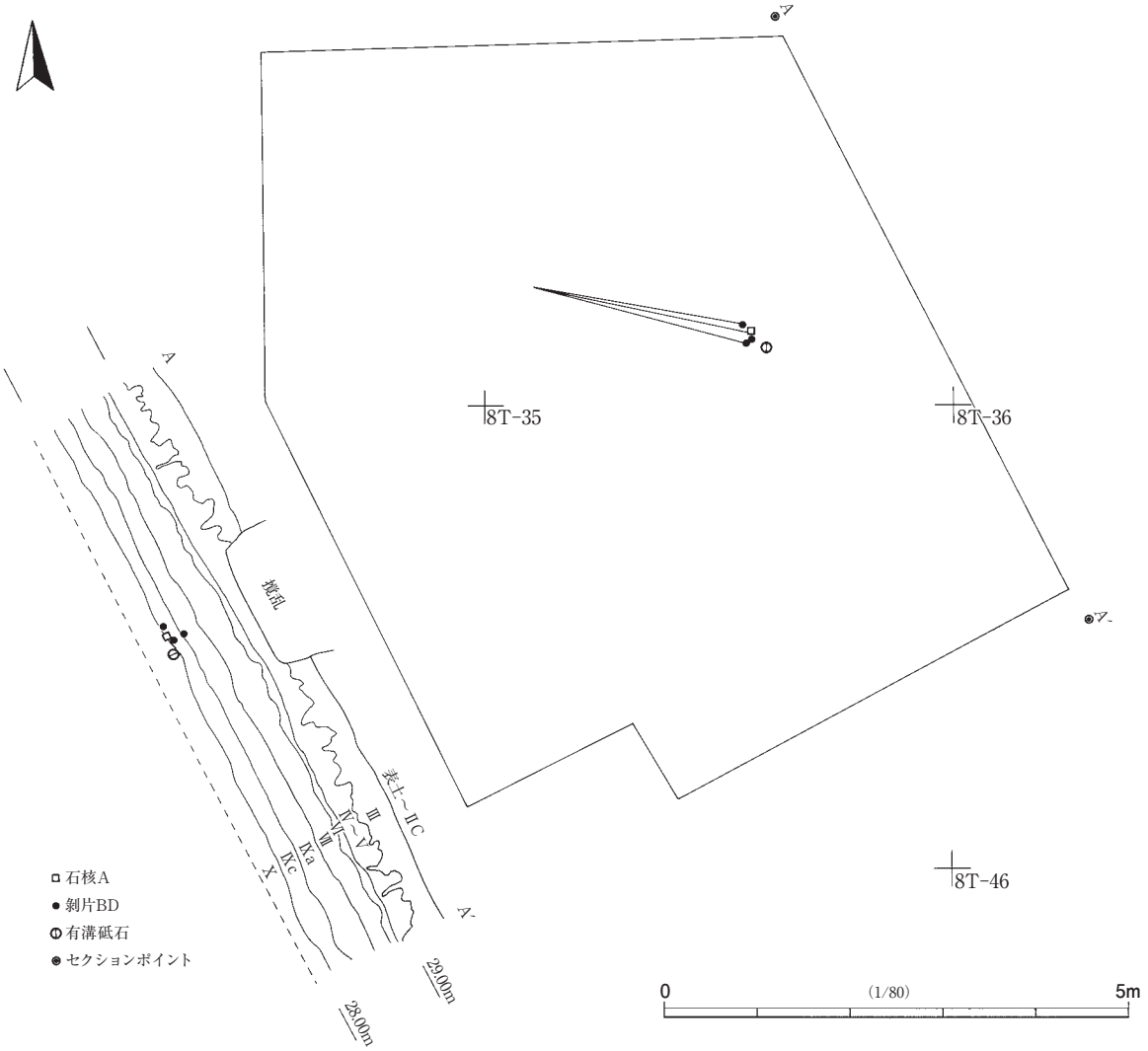
狭い範囲に６点の遺物が集中していた。内訳は、剥片４点と有溝砥石２点１個体である。産出層準はⅨ層最下部であった。埋没前後の遺物の移動を考慮すれば、一か所にまとめて置かれていたと考えても不自然ではない。

１は砂岩製の有溝砥石である。本体に小型の剥離片が接合するが、これは埋没後の破損であり、企図的な剥離によるものではない。概略不整五角錐状をしている。長軸に沿って平行する溝が５条ある。各溝は緩く湾曲した断面形態をしており、その延長は100mm前後ある。側縁の一部には粗い成形剥離痕が残される。成形剥離痕は研磨面を切るので、ある程度研磨が進んだ段階での成形痕とみられる。底面は剥離面で、角柱状に粗割りされたブランクが想定される。断面は不整五角形であるが、一面の幅が広く、この面にも両側縁からの成形痕がある。また、この面には不規則な短線状痕が十条以上観察され、反対側の面の研磨に伴う使用痕とも考えられる。以上のことから、この石器はもともとかなり大型の砥石であり、研磨作業に伴って再加工され、次第に小型化していった過程が想定される。さらに、横断面から窺われるように、各溝の曲率には微妙な差があり、研磨対象の状況（幅の広狭と湾曲率）に応じて各面が使い分けられていた可能性もある（永塚 2001）。重量は0.6kg程でそれほど重くはないが、頻繁に持ち歩かれる石器ではない。ほぼ全面に溝が刻まれ、長期間管理されていたことが分かる。

２は２a剥片BD、２b剥片BD、２c石核Ａの接合状況を示す。切り合い関係から、厚みのある立方体に近い剥片の尾部から、さらに剥片を剥離していることがわかる。２a＋２b剥離後に、さらにその剥離面から、小型の剥片が剥離されているが、この剥片は残されていなかった。分厚い剥片のリダクションを示す資料である。



第４図　出口・鐘塚遺跡調査範囲



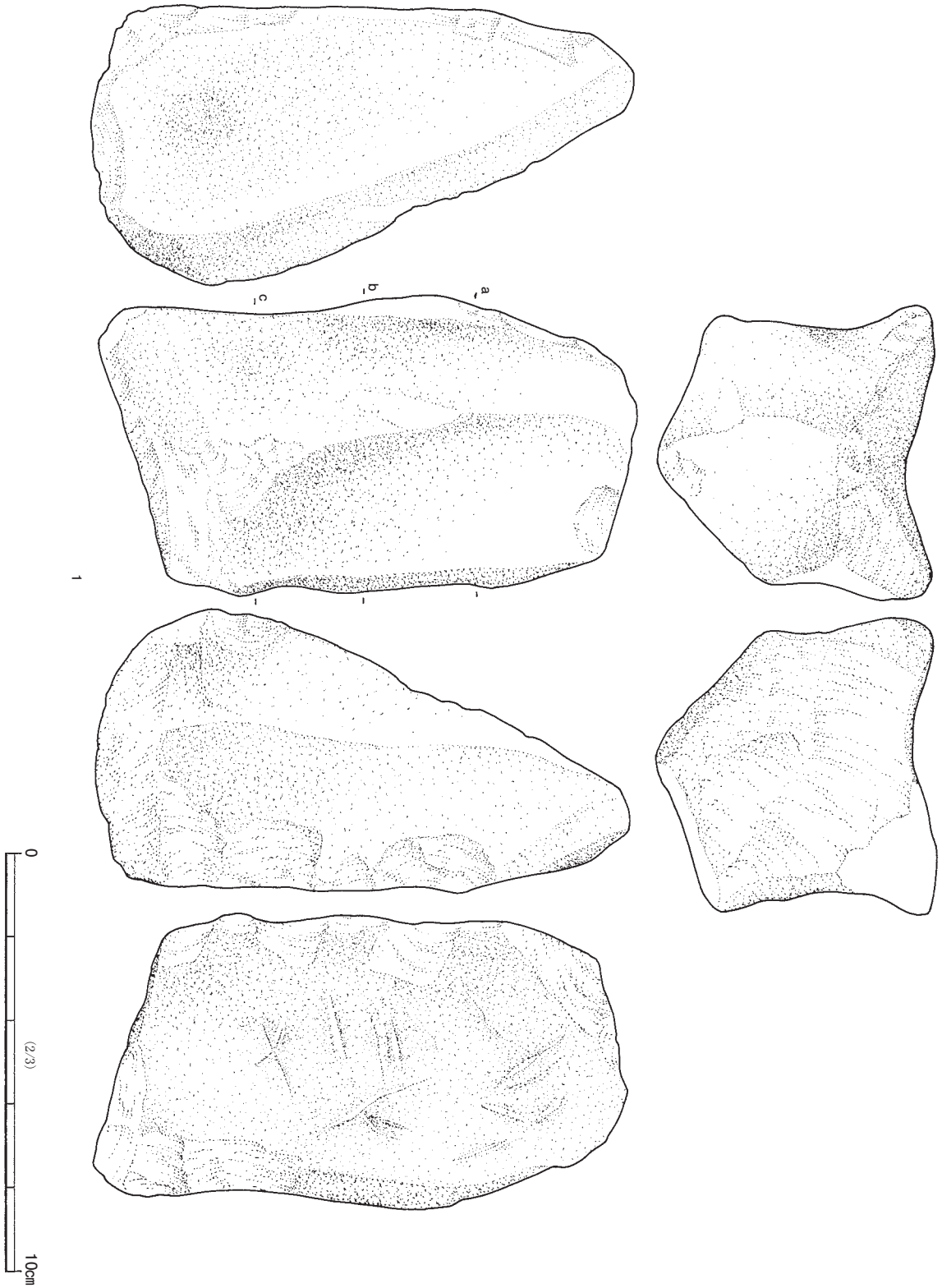
第５図　集中１遺物分布図

３は碧玉の剥片 BD である。折れ面にも細部加工が及んでいる。背面の剥離痕から、打面の位置を反転させる工程が窺われる。

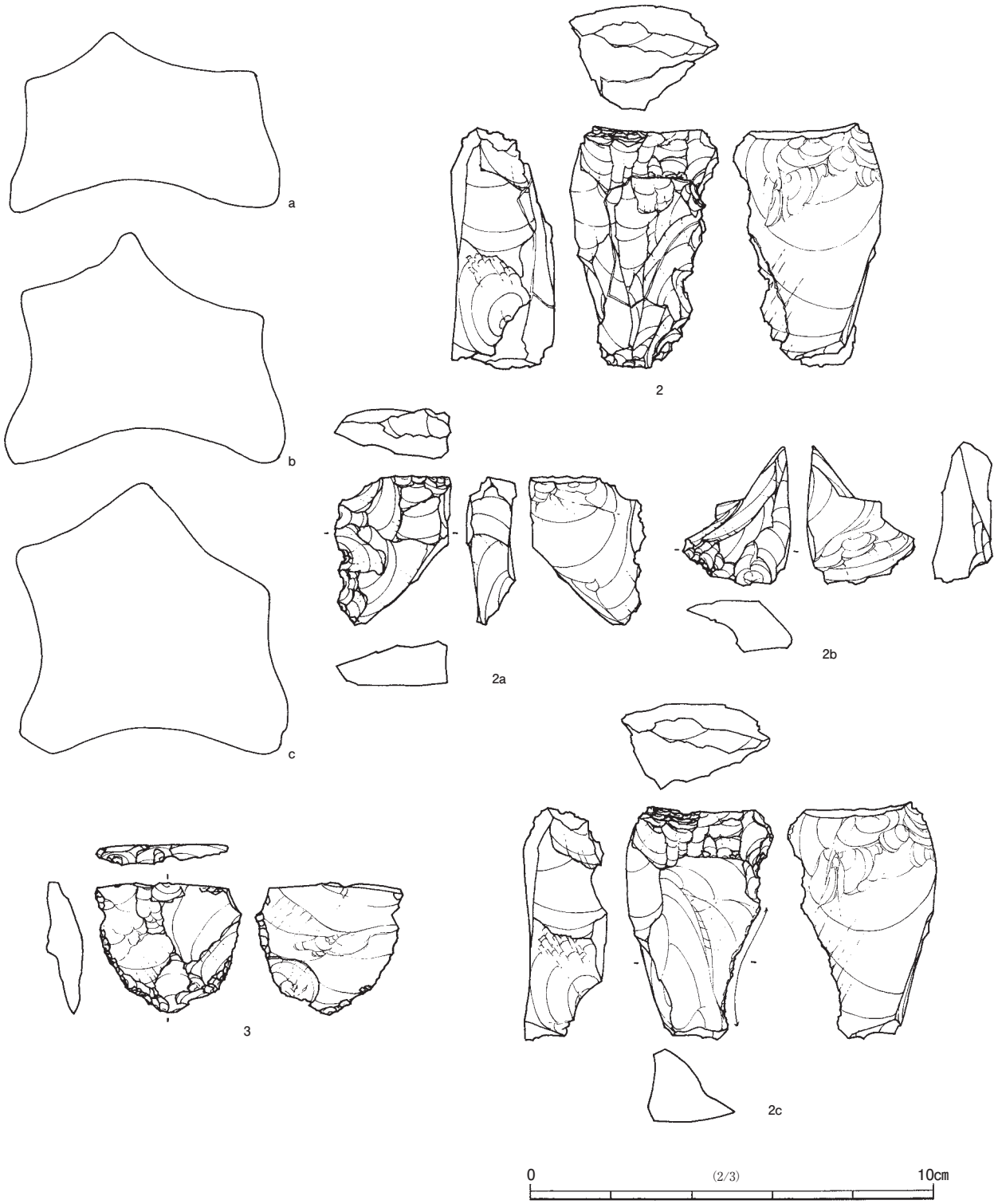
以上のように、本集中は砥石のほか、使用過程におかれた石器類のみが寄せ集められた状況を示している。これはキャッシング（一時的保管場所への収納）を示す指標と考えられる。将来の利用を想定した戦略といえるだろう。近傍に何らかの目印があったことはいうまでもない。

第１表　集中１石器属性表

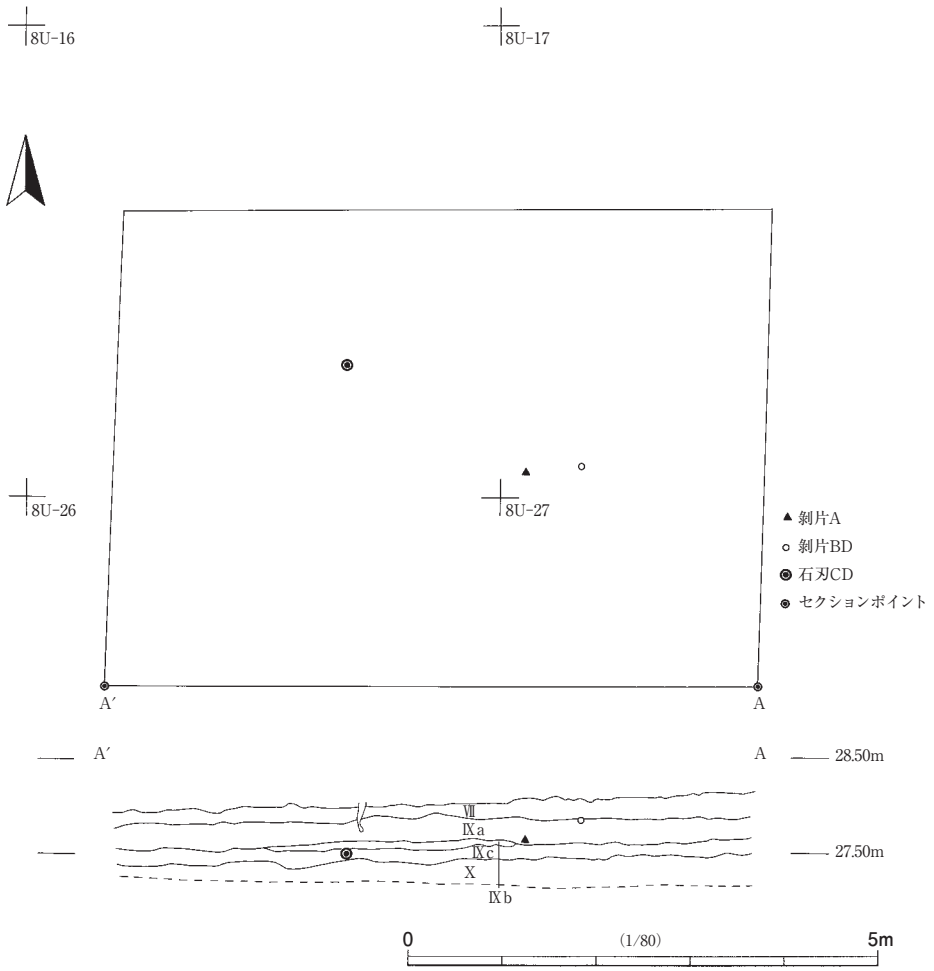
挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)
3	8T-35	15	剥片 BD	碧玉	32.8	36.0	9.3	7.86
2a	8T-35	16	剥片 BD	珪質頁岩 Y	37.1	28.8	12.1	11.29
2c	8T-35	17	石核 A	珪質頁岩 Y	57.9	37.0	21.3	31.01
2b	8T-35	18	剥片 BD	珪質頁岩 Y	34.5	27.1	13.1	7.80
1	8T-35	19	有溝砥石	砂岩	130.5	74.9	67.8	582.26



第６図　集中１の遺物（１）（断面図は第７図左）



第７図　集中１の遺物（２）



第８図　集中２遺物分布図

２　集中２

狭い範囲から石刃１点、剥片２点が出土した。産出層準はⅨ層の上部～下部であるが、遺物点数が少ないため、時期的な限定は難しい。

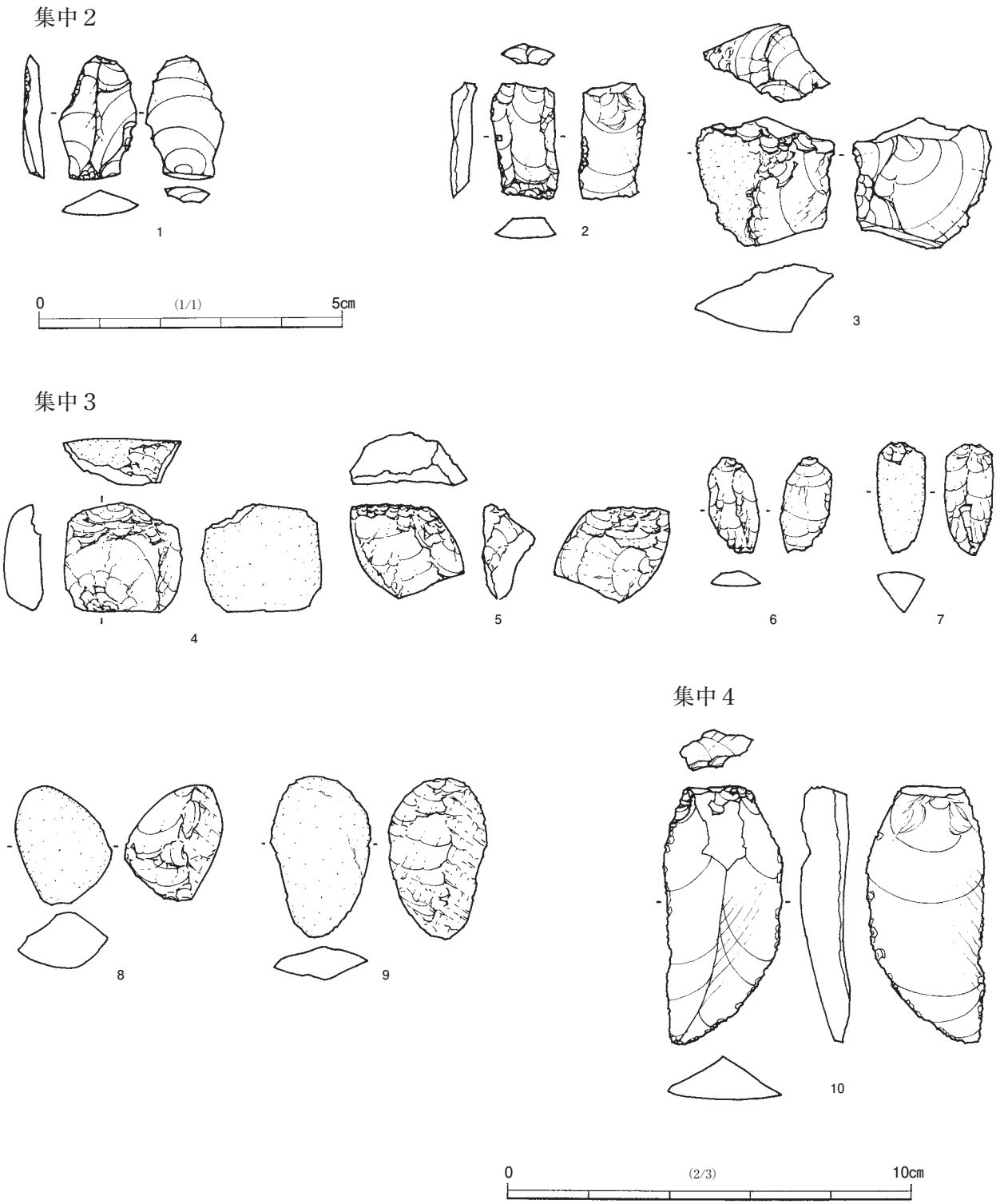
１は剥片 BD である。打面を残す小型縦長の剥片であるが、背面左側縁にニブリングによる整形がある。さらに先端部には尾端ステップとなる小剥離痕があり、明らかにインパクト・ダメージと判定される。同様の小型剥片製尖頭器は他の集中にも頻出するが、これまでほとんど注目されてこなかった器種である。これにはすでに「端部整形尖頭器」という呼称を与えたが、改めて注意を喚起したい。

２は石刃 CD である。背面尾部の剥離は石刃のトランケーションであり、左側縁にかなり顕著な使用痕が認められる。形態的には「端部整形刃器」に含まれる。

３は剥片 A である。打面と作業面の入れ替えが行われている。

第２表　集中２石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)
2	8U-16	2	石刃 CD	碧玉	28.3	16.4	5.0	2.78
1	8U-17	2	剥片 BD	珪質頁岩 H	20.2	12.9	3.9	0.73
3	8U-17	3	剥片 A	珪質頁岩 H	32.2	34.8	17.1	16.26

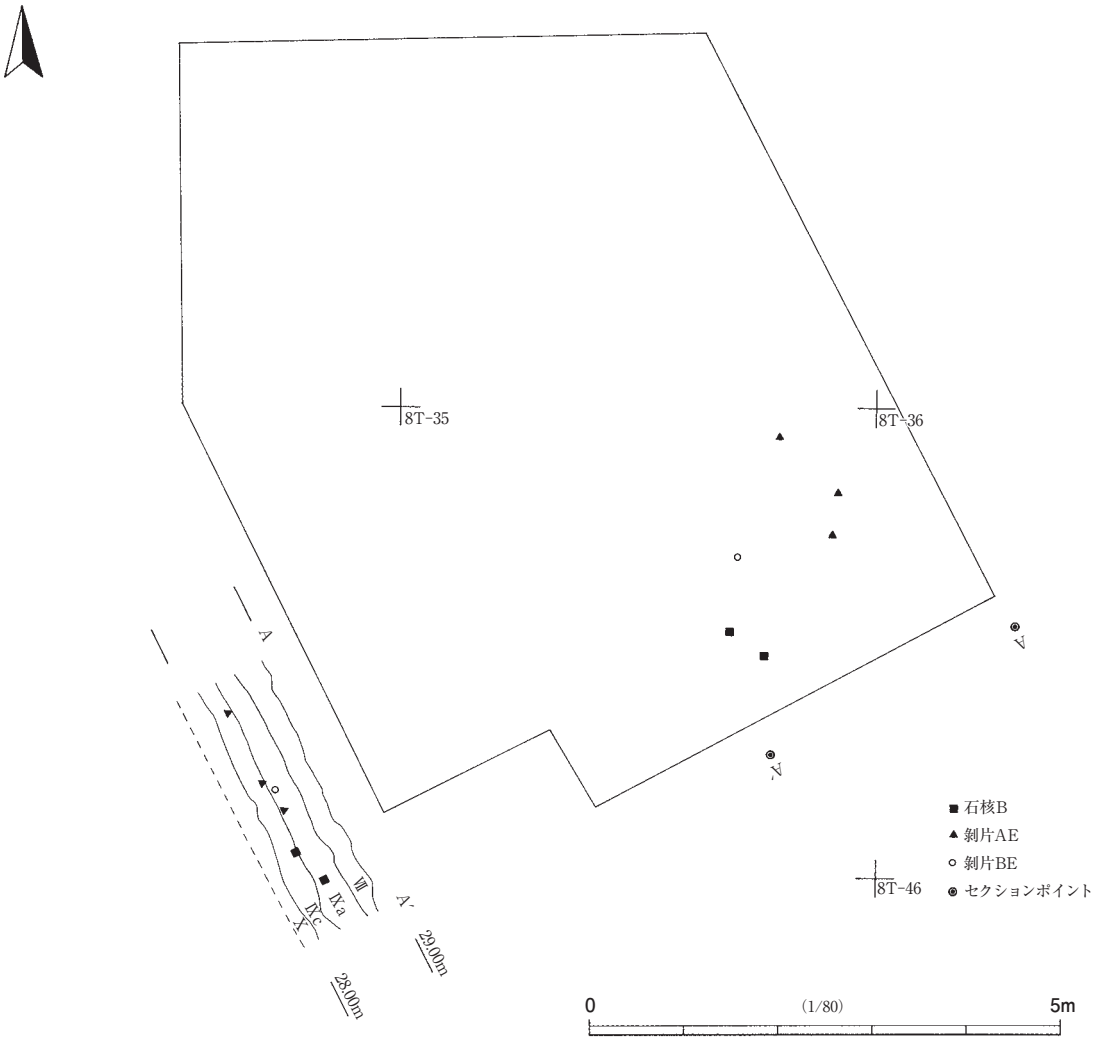


第９図　集中２・集中３・集中４の遺物

３　集中３

集中１の南側に接するⅨ層中部を産出層準とする小規模な集中である。遺物総数は５点であり、房総半島万田野・長浜層の礫が使われている。遺存する資料からは、石核Ｂからの小型剥片の限定的生産を背景として形成された集中である。

４は黒色安山岩製の石核Ｂである。礫面付きの剥片をブランクとし、小型剥片の剥離が開始された段



第 10 図　集中３遺物分布状況

階の石核である。

５は４と同一母岩の石核Ｂである。やや剥離は進捗し、小型の剥片が生産されている。６は剥片 AE である。酸化フロントの発達する石材であるため､刃こぼれの観察が難しい。前記石核と同一母岩である。

７、８は同一母岩の剥片 AE である。非常に小型の円礫を両極剥離によって分割剥離していることがわかる。

９はホルンフェルス製の剥片 AE で、背面は礫面が覆う。７、８とまったく同じように円礫を分割剥離する状況が認められる。

第３表　集中３石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
9	8T-25	22	剥片 AE	ホルンフェルス	39.5	24.2	8.5	7.56
8	8T-25	23	剥片 AE	黒色安山岩	15.3	29.6	21.2	8.80
7	8T-25	24	剥片 AE	黒色安山岩	27.8	12.1	10.1	2.93
6	8T-25	25	剥片 BE	黒色安山岩	23.3	13.1	4.9	1.22
4	8T-25	26	石核Ｂ	黒色安山岩	26.5	29.1	9.8	11.97
5	8T-25	27	石核Ｂ	黒色安山岩	23.3	28.8	13.2	7.47

4　集中４

珪化泥岩製の石刃（正確にはコンバージェント・フレイク）がⅨc層から単独出土している。単剥離面の打面を残し、大きめの打瘤と裂痕を留めている。また、両側縁部には使用痕が明瞭に残されている。

第４表　集中４石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
10	8T-23	2	石刃Ｃ	珪化泥岩Ｔ	63.4	29.1	12.1	13.27

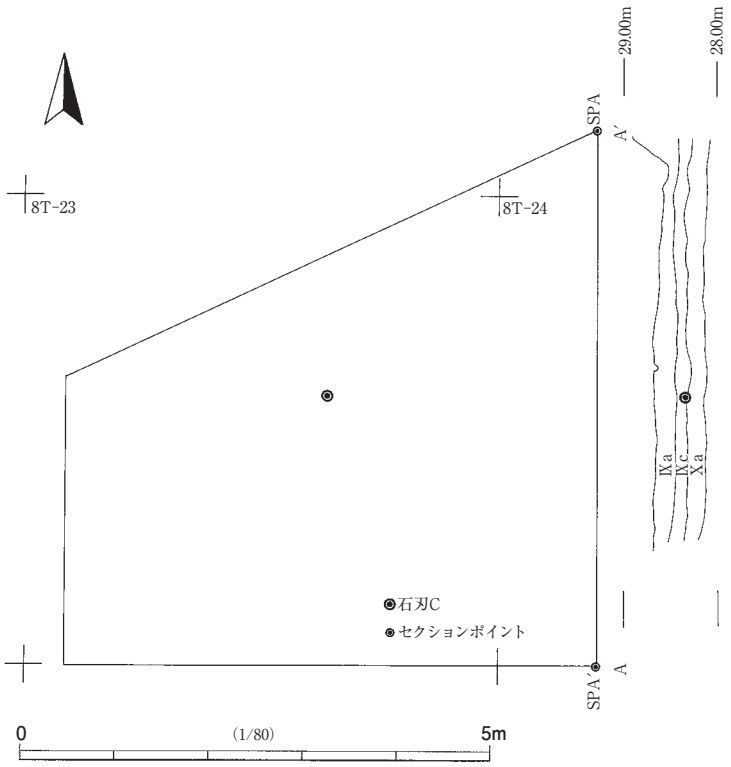
5　集中５

8T-25 ～ 8T-35 を中心とした径４ｍ × ３ｍくらいの範囲内に、石刃２点、石核Ｂ２点、剥片 33 点、合計 37 点の石器が散布している。剥片類の内訳は、Ａ類４点、AC 類３点、AD 類１点、Ｂ類８点、BC 類８点、AD 類９点であり、使用痕や加工痕の認められるものが 17 点、64% に達する。遺物の産出層準はⅥ層～Ⅶ層である。

接合資料は２点１組ある（１）。石核側面部を切り取る剥片が２点接合する。

２、３は石核Ｂである。２はチャートの裂片をブランクとするもの。３は厚手の珪質頁岩Ｙの剥片をブランクとし、縦長の小剥片が剥離されている。同一母岩の両極剥片は遺存していない。

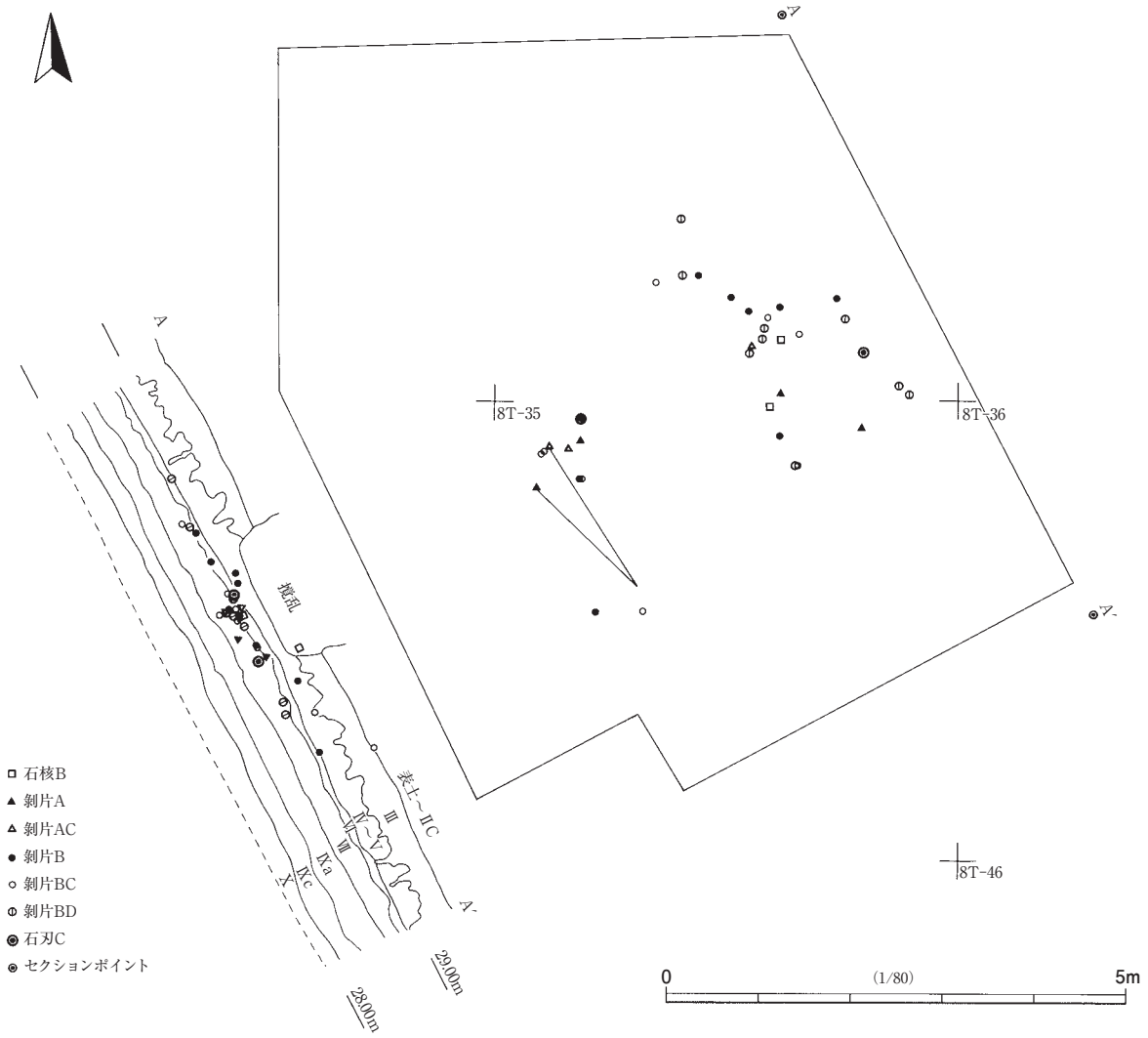
４、５は石刃とした。両者とも対向打面の石核から剥離されている。打面には細かい調整剥離が認められる。５は長さが短いことから、石刃用石核の消耗した段階の作出品とみられるが、幅の広い平面形から、二次稜線をつくるためのコントロール剥片である可能性もある（二次稜線、コントロール剥片の技術的意味は田村前掲論文参照）。



第 11 図　集中４遺物分布図

６は石刃生産に伴う一次稜線形成剥片である。明確な稜調整は認められない。使用痕付き剥片である９もコントロール剥片と分類しがちである。背面右側の剥離面の切り合いは稜形成のためとも解釈されるかもしれないが、ブランクは小型不整形であり、一般的剥片の剥離痕である可能性も高い。この場合には打面のローテーションということになる。

７～ 16、24 は使用痕と判断される刃こぼれのある剥片である。いずれも小型のブランクである。平均長 20.4mm（ｄ = 6.47）、平均幅 19.4mm（ｄ = 8.08）、平均厚 5.6mm（ｄ = 2.00）であり、細石器という評価が妥当である。これらの剥片が剥離された石核の実態を知りたいが、剥離過程をうかがうに足る資料に



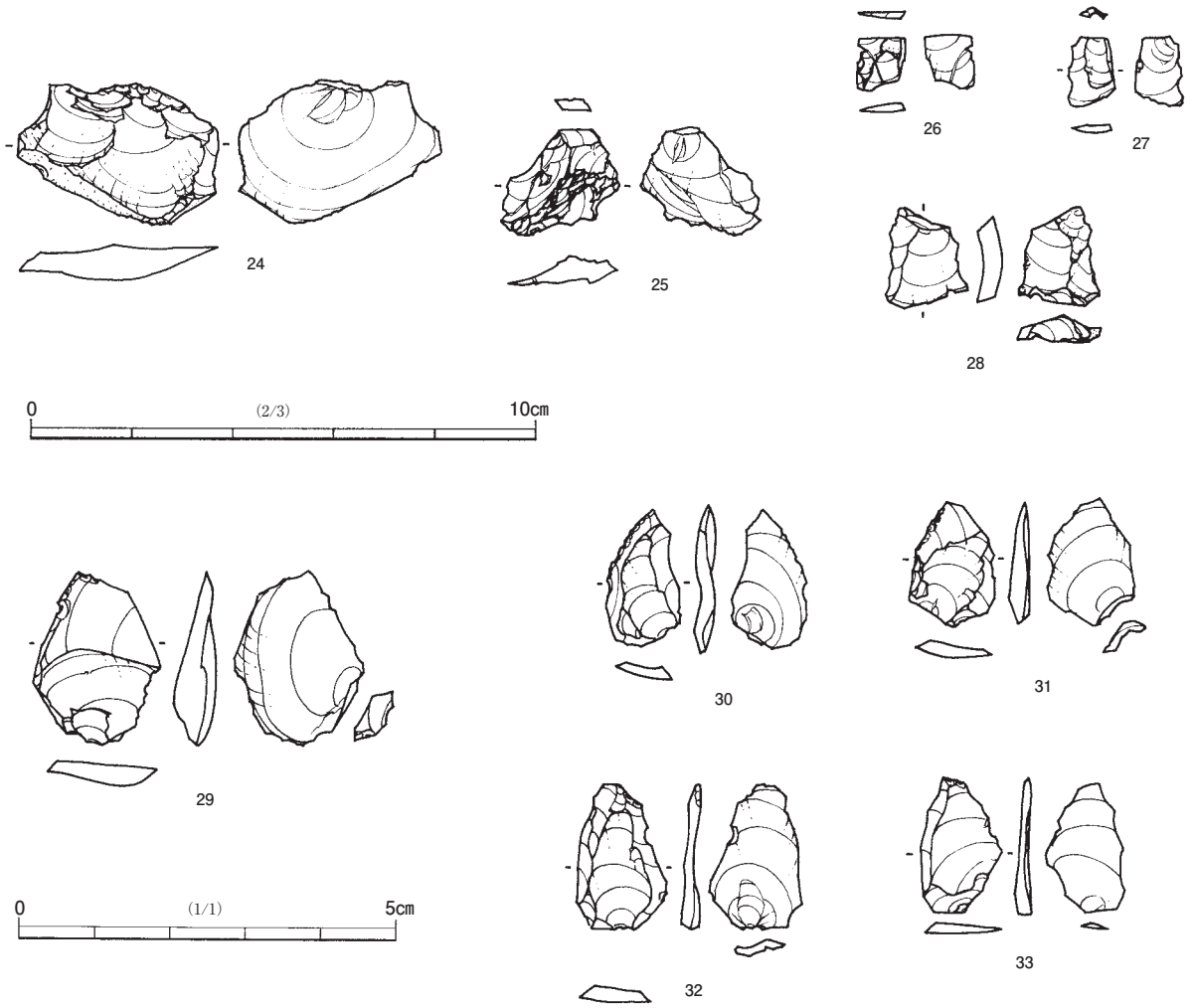
第 12 図　集中 5 遺物分布図

乏しい。ただし、複剥離打面と背面の交叉加撃軸によって、小刻みに打面ローテンションを反覆する工程が考えられることから、小型サイコロ状石核から剥離された可能性が高い。このサイコロ状石核は、石材の同一性から、当初は石刃用の石核、あるいは石刃そのものであったことも想定される。大型の石刃用石核のリダクション過程の終末段階で、このような細石器石器群が構成されることは大きな驚きである。

19 ～ 22、25 ～ 28 は小型の剥片である。

23、29 ～ 33 はニブリングによる調整が観察される剥片である。23 は截断剥片の背面左側縁にニブリングが観察される。29 ～ 33 は端部整形尖頭器と分類すべき剥片である。29 は貝殻状の剥片を横に使い、側縁と底縁との交叉部が尖頭部を構成する。ニブリングは背面左側縁に観察される。30 は加撃軸と石器長軸が交叉する剥片（斜軸マイクロ剥片）を素材とする。ニブリングによる整形は背面左側縁部に明瞭に認められる。31 もこれと特徴を同じくする。32 ではニブリングの形跡は側縁部には認められないにもかかわらず、尖頭部にはインパクト・ダメージ（投射具が対象に衝突した際に衝突部位に生じる樋状剥離や折れ)がつき、投射具チップとして機能していたことが想定される。33 もこれと類似した石器で、インパクト・ダメージとはいえないが、微細な剥痕が尖頭部周辺に認められる。細部加工の有無が投射用尖頭器の基準とならないことは明白である。

第13図　集中５の遺物（１）

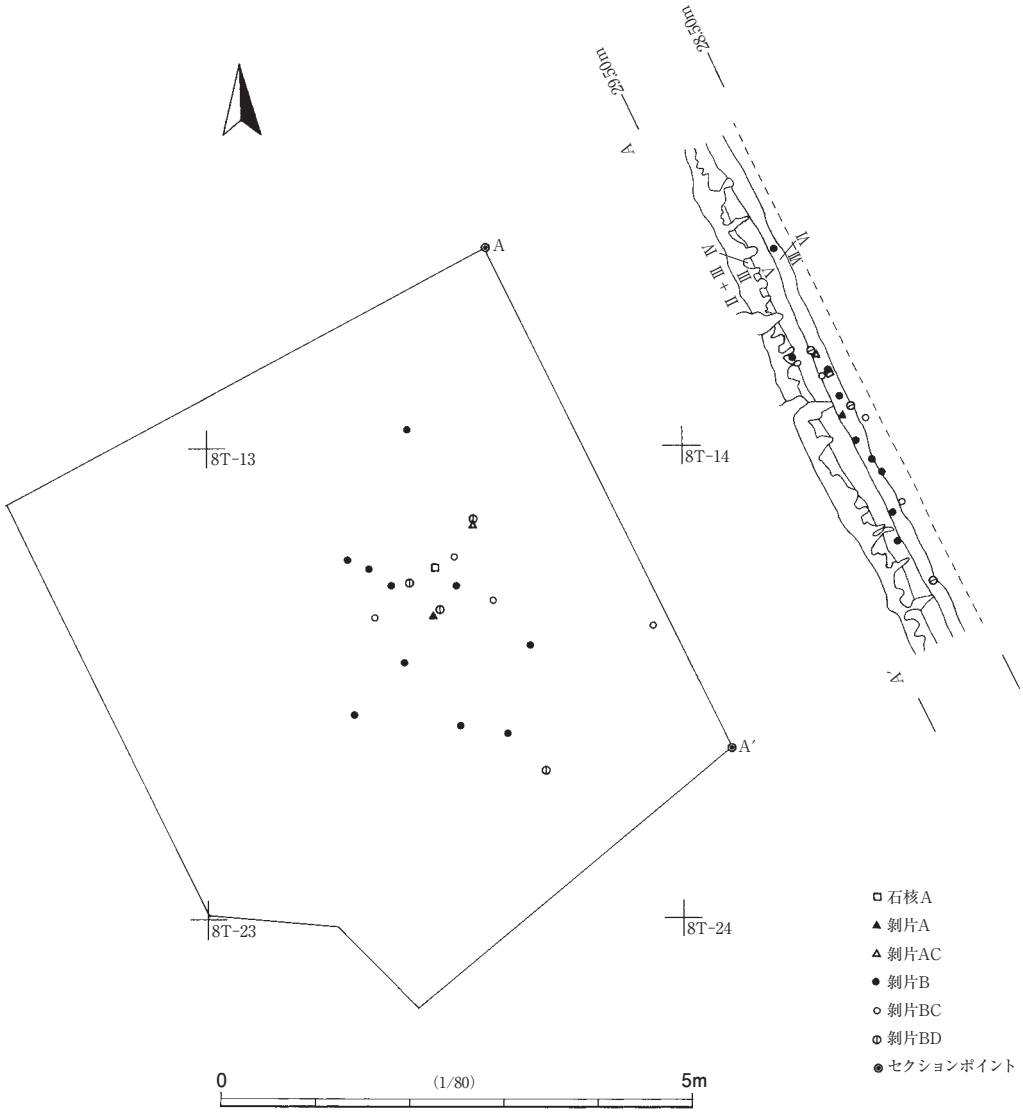


第 14 図　集中５の遺物（２）

D 類剥片全体の平均長 15.0mm（d = 3.06）、平均幅 14.0mm（d = 5.67）、平均厚 3.1mm（d = 1.27）である。D 類に含まれる端部加工尖頭器の平均長 17.7mm（d = 2.97）、平均幅 13.2mm（d = 2.68）、平均厚 2.8mm（d = 0.73）となっている。サンプル数が少なすぎて統計的な検定に耐えないが、長さがやや長く、薄手の剥片が選択されている可能性はある。

第５表　集中５石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)
30	8T-25	1	剥片 AD	珪質頁岩 Y	15.4	13.6	2.6	0.21
24	8T-25	2	剥片 AC	珪質頁岩 Y	28.2	39.9	7.4	6.45
14	8T-25	3-1	剥片 BC	珪質頁岩 Y	14.8	23.6	6.6	1.36
19	8T-25	3-2	剥片 B	珪質頁岩 Y	13.0	10.2	1.9	4.10
21	8T-25	4	剥片 B	珪質頁岩 Y	17.6	17.9	4.1	0.80
3	8T-25	5	石核 B	珪質頁岩 Y	39.8	26.9	15.0	11.46
8	8T-25	6	剥片 BC	珪質頁岩 Y	29.7	19.5	7.3	3.05
27	8T-25	7	剥片 B	珪質頁岩 Y	14.9	9.7	2.1	0.16
32	8T-25	8	剥片 BD	珪質頁岩 Y	19.3	12.1	2.6	0.38
5	8T-25	9	石刃 C	珪質頁岩 Y	38.7	25.6	6.3	6.94
29	8T-25	10	剥片 BD	珪質頁岩 Y	17.5	21.9	3.9	1.14



第 15 図　集中 6 遺物分布図

15	8T-25	11	剥片 BD	珪質頁岩 Y	15.8	13.7	4.0	0.55
6	8T-25	12	剥片 A	珪質頁岩 Y	50.9	10.8	7.8	3.39
17	8T-25	13	剥片 BC	珪質頁岩 Y	11.9	10.4	3.3	0.26
13	8T-25	14	剥片 BD	珪質頁岩 Y	10.2	13.5	2.0	0.15
12	8T-25	15	剥片 BD	珪質頁岩 Y	16.2	25.9	5.5	1.43
18	8T-25	16	剥片 BC	珪質頁岩 Y	16.8	13.2	5.2	0.57
31	8T-25	17	剥片 BD	珪質頁岩 Y	14.6	12.2	2.9	0.29
26	8T-25	18	剥片 B	珪質頁岩 Y	9.3	9.8	1.8	0.11
7	8T-25	19	剥片 B	珪質頁岩 Y	11.4	14.3	4.5	0.71
33	8T-25	20	剥片 BD	珪質頁岩 Y	17.3	10.4	1.9	0.25
23	8T-25	21	剥片 BD	珪質頁岩 Y	10.1	8.7	3.9	0.22
	8T-25	22	剥片 A	珪質頁岩 Y	4.6	8.0	0.8	0.06
4	8T-35	2	石刃 C	珪質頁岩 Y	27.4	16.3	6.4	2.37
25	8T-35	3	剥片 B	珪質頁岩 Y	21.1	23.9	6.0	1.89
28	8T-35	4	剥片 A	珪質頁岩 Y	19.6	17.9	6.2	1.49
9	8T-35	5	剥片 AC	珪質頁岩 Y	26.9	17.8	6.8	3.44
11	8T-35	6	剥片 BC	珪質頁岩 Y	24.2	33.1	5.8	2.07
1a	8T-35	7	剥片 A	珪質頁岩 Y	23.9	12.6	6.7	1.52

20	8T-35	8	剝片 B	チャート	6.9	16.3	3.9	0.38
7	8T-35	9	剝片 BC	珪質頁岩 Y	14.8	17.4	4.6	0.66
10	8T-35	10-1	剝片 BC	珪質頁岩 Y	18.6	18.2	4.9	0.88
	8T-35	10-2	剝片 BD	珪質頁岩 Y	12.8	7.9	1.2	0.07
22	8T-35	11	剝片 B	珪質頁岩 Y	13.6	15.9	5.5	0.50
2	8T-35	12	石核 B	チャート	12.7	28.0	9.1	2.42
1b	8T-35	13	剝片 AC	珪質頁岩 Y	31.5	17.5	9.8	4.29
16	8T-35	14	剝片 BC	珪質頁岩 Y	14.1	18.0	4.6	0.46

6　集中６

４m × ３m くらいの範囲内に 21 点の石器が分布している。遺物産出層準は、遺物台帳記載ではⅦ層、近接する断面図投影ではⅥ層となっており、判断が難しい。Ⅵ層からⅦ層としておくが、集中５との新旧は決定できない。

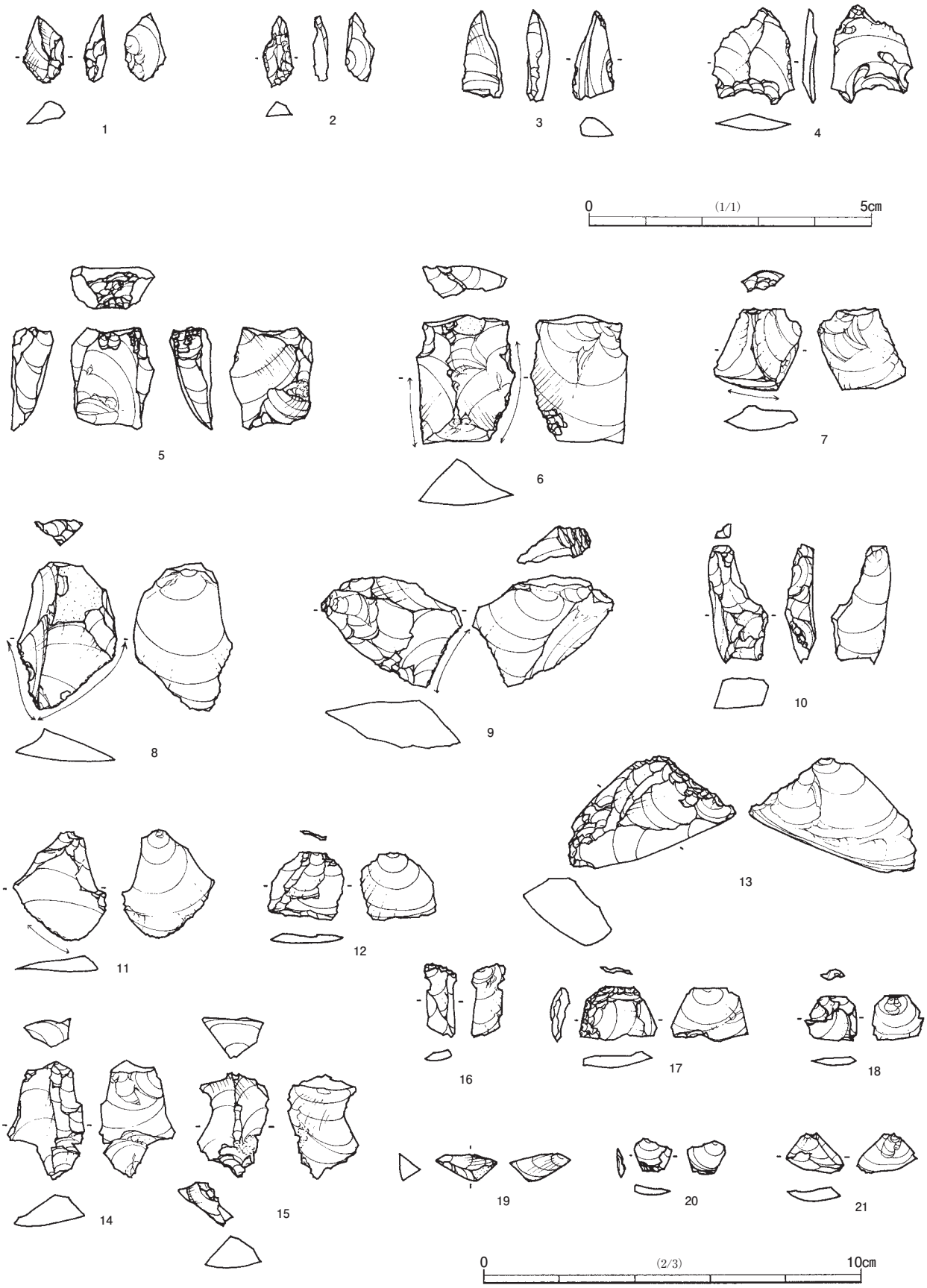
21 点の石器の内訳は、石核 A が１点ある他はすべて剝片である。剝片の内訳は、A 類１点、AC 類１点、B 類 11 点、BC 類４点、BD 類４点であり、集中５と同様に使用痕や加工痕付きのものが多く、全剝片の 45% を占めている。

１～４は剝片 D としたが、本報告の用語法では端部整形尖頭器であり、細石器と認定される。１は長さ 11.8mm、幅 7.0mm、厚さ 0.17g という小型品で、斜軸マイクロ剝片側縁にニブリングを加え、基部をつくりだしている。２も小型で、長さ 12.7mm、幅 5.1mm、厚さ 2.8mm である。素材の使い方は１と類似するが、ニブリングは基部と側縁の一部に観察される。３はやや大きいが、それでも長さ 15.8mm、幅 7.0mm、厚さ 2.1mm である。素材は E 類剝片である可能性もある。破損している可能性もある。側縁部に僅かな剝離痕が認められる。注目すべきなのは、尖頭部で、マイクロ・インパクト・ダメージが明瞭に残されていることである。これは実測図では表現できなかった。４は最も大型で、長さ 16.5mm、幅 14.1mm、厚さ 3.5mm である。基部が抉れる凹基鏃型で、側縁、尖頭部、基部の一部などに断続的にニブリングによる整形剝離痕を留める。類例が袖ケ浦市関畑遺跡第 30 ブロックにある（新田 2004）。

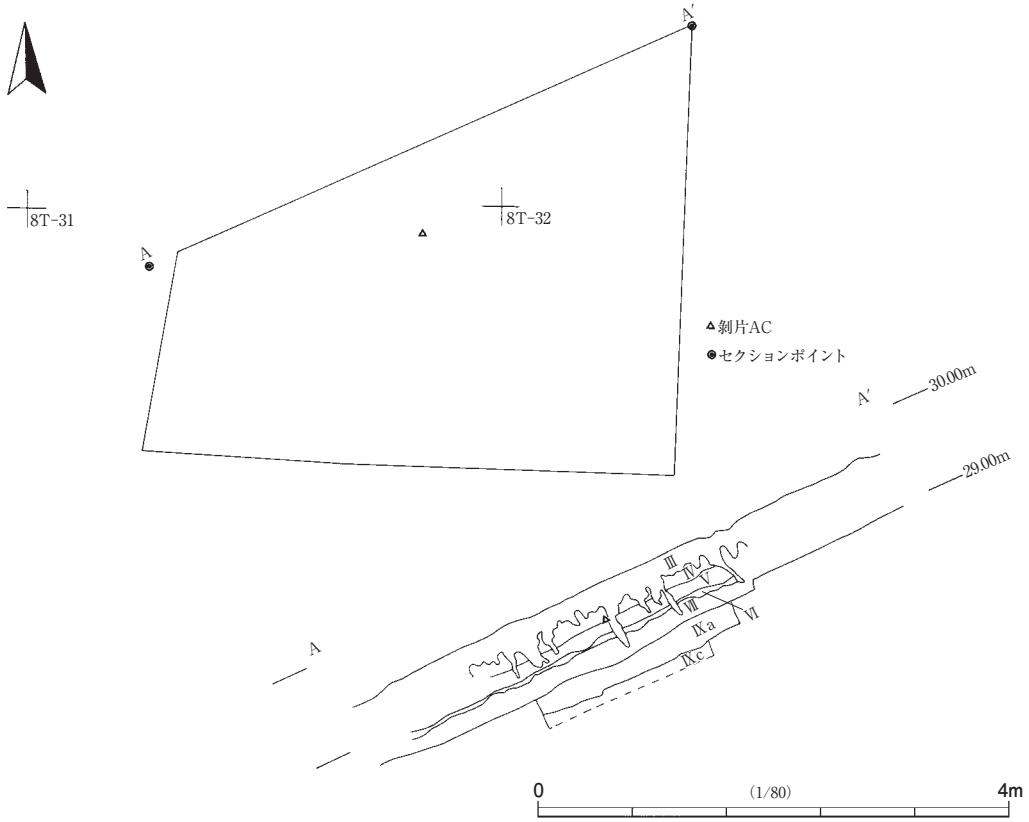
５は黒曜石の厚みのある剝片を素材とする石核 A である。石刃モード B と呼ばれる、剝片や石刃を素材とする石核の側縁から小石刃を剝離する手法であり、後期旧石器時代初頭以来、汎世界的に認められ、後期旧石器時代タイプの石刃技法の特徴とされている（田村前掲論文）。この石核から剝離された小石刃は長さ 25mm、幅６mm 位であり、やや尾部の湾曲する形態になる。僅かにツイストしていたかもしれない。ツイストした小石刃生産は石刃モード B の特徴である。

６～９、11 の５点は使用痕と判断される刃こぼれのある剝片である。いずれも本集中の剝片としては大型の部類に属する。各資料に共通するのは、背面加撃軸が一方向にそろわない例が多いこと、複剝離打面をもつこと、形態的に斉一製を欠くことなどである。こうした特徴は集中５の剝片類に近く、やはりサイコロ状の石核から剝離された可能性が高い。

10、12 ～ 21 は剝片である。13 の碧玉製の剝片は線状打面、背面の潰れなど E 類剝片の特徴も認められるが、腹面は通常の剝離面であるところから、石核 B の制御用剝片であった可能性が高い。もともとの石核 B によっては小石刃の生産が難しくなったため、石核を斜めに分割するための加撃によるものだが、打角のコントロールが不充分で、端部がヒンジに終わっている。これ以外の剝片については、C 類剝片で指摘した通りである。



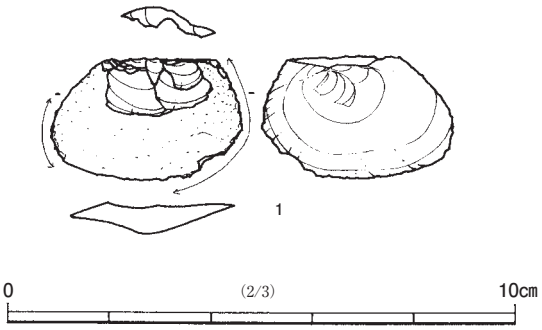
第16図　集中6の遺物



第 17 図　集中 7 遺物分布図

第 6 表　集中 6 石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)
12	8T-13	1	剥片 B	黒色安山岩	17.8	19.9	2.1	0.65
3	8T-13	2	剥片 BD	黒曜石	15.8	7.0	3.9	0.30
8	8T-13	3	剥片 BC	珪質頁岩 Y	39.1	25.8	9.1	7.72
5	8T-13	4	石核 A	黒曜石	27.2	21.9	11.3	6.32
20	8T-13	5	剥片 B	黒曜石	8.1	9.9	2.5	0.15
19	8T-13	6	剥片 A	黒曜石	7.8	15.9	5.4	0.32
15	8T-13	7	剥片 B	黒曜石	27.8	19.1	11.2	3.47
21	8T-13	8	剥片 B	黒曜石	10.4	14.9	3.5	0.31
13	8T-13	9	剥片 B	珪質頁岩 Y	37.9	32.8	13.0	12.83
16	8T-13	10	剥片 B	碧玉	19.3	8.9	2.8	0.34
17	8T-13	11	剥片 B	碧玉	13.8	20.1	4.9	0.90
10	8T-13	12	剥片 B	碧玉	31.1	15.8	8.0	3.17
4	8T-13	13	剥片 BD	碧玉	16.5	14.1	3.5	0.50
18	8T-13	14	剥片 B	珪質頁岩 Y	11.8	13.7	3.0	0.33
9	8T-13	15	剥片 BC	珪質頁岩 Y	29.4	37.3	12.3	9.64
6	8T-13	16	剥片 AC	黒曜石	34.1	25.6	12.3	8.96
2	8T-13	17	剥片 BD	黒曜石	12.7	5.1	2.8	0.10
7	8T-13	19	剥片 BC	黒色安山岩	22.1	23.7	6.9	2.90
14	8T-13	20	剥片 B	珪質頁岩 Y	30.9	19.8	8.1	3.74
11	8T-13	21	剥片 BC	珪質頁岩 Y	28.1	24.2	4.9	2.57
1	8T-13	22	剥片 BD	黒曜石	11.8	7.0	3.2	0.17



第 18 図　集中７の遺物

7　集中７

珪化泥岩の剝片 AC が単独で出土している。産出層準はⅣ・Ⅴ層層下部と記録されている。今回報告する集中としては、もっとも新しい時期に属する。

第７表　集中７石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)
1	8T-31	2	剝片 AC	珪化泥岩 T	24.1	37.9	6.5	4.90

島立　桂　1994 『千原台ニュータウンⅥ－草刈六ノ台遺跡－』(財) 千葉県文化財センター
田村　隆　2015 「まれびとの訪い－日本列島石刃石器群の成立－」『考古学研究』61-4、24 ～ 44
新田浩三　2004 『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財発掘調査報告書 13 －袖ケ浦市関畑遺跡－』（財）千葉県文化財センター
永塚俊司　2001 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－天神峰最上遺跡（空港№ 64 遺跡）－』（財）千葉県文化財センター

第３章　縄文時代の遺構と出土遺物

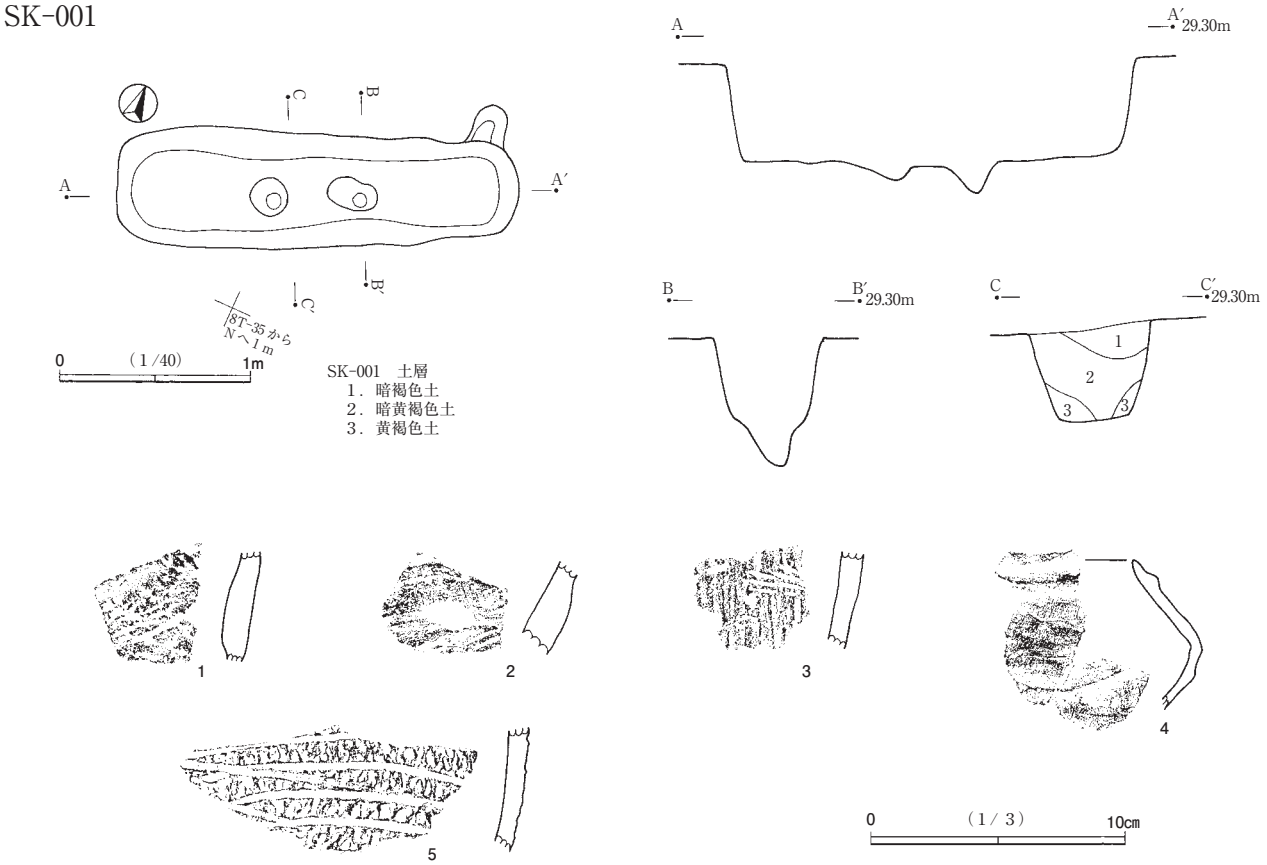
１　SK-001

出口・鐘塚（３）遺跡の下層拡張調査段階で捕捉された。検出面はⅣ・Ⅴ層であり、本来の掘り込み面は確認できない。長軸 2.1m、短軸 0.6m の隅丸長方形で、検出面からの深さは 0.5m である。底面中央部に下部施設である小ピットがある。帰属時期不明の陥穴である。

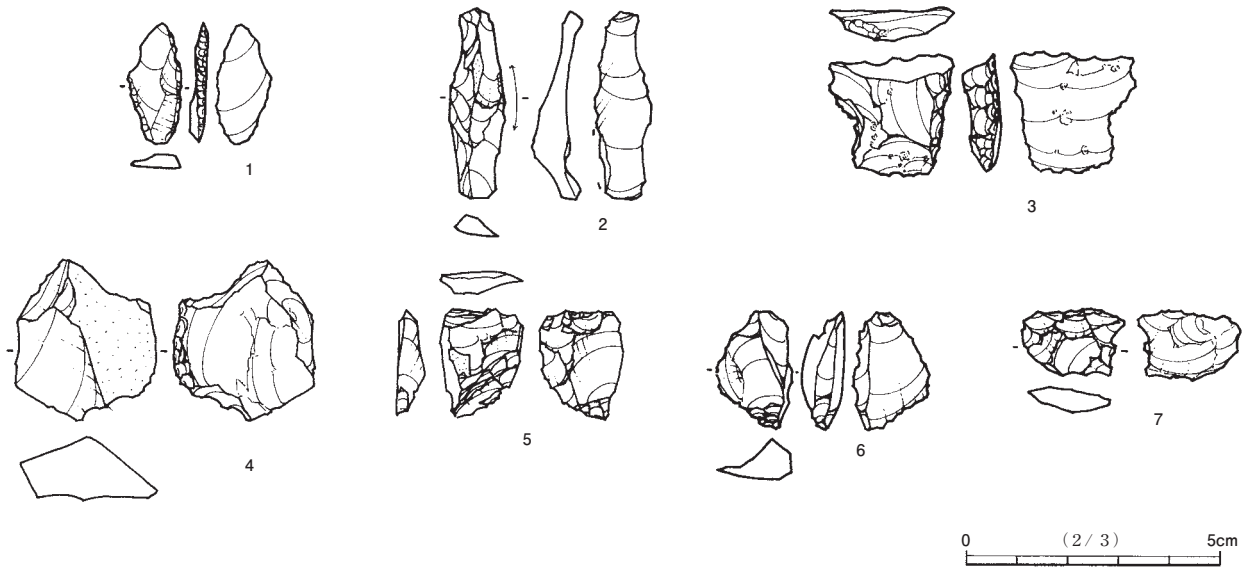
２　縄文時代の遺物

調査区からは少量の縄文土器と石器や礫が出土した。遺物には後期旧石器時代の資料が含まれるが、混在したものか、再利用によるものか判断できないので本項で記載する。

縄文土器の内訳は、井草（大丸）式１点、田戸下層式１点、型式不詳早期後半条痕文土器４点、黒浜式８点、阿玉台式２点、堀之内式４点、加曽利Ｂ式３点、所属型式不明 16 点、合計 39 点である。いずれも細かい破片で、第 19 図にその一部を示した。１・２は早期後半の繊維土器で、貝殻条痕が付される。３は柔軟なもので表裏をなでられた土器で、多量の繊維を含み、スリップのある胎土の特徴から黒浜式と考えられる。４は堀之内２式の注口土器であろう。器壁は薄く、堅緻な焼成で、器面は入念に磨かれている。５は加曽利Ｂ２式の粗製土器である。



第 19 図　縄文時代の遺構と縄文土器



第20図　縄文時代遺物包含層出土石器

石器は第20図に示す。１は保田層産珪質頁岩製の小型のナイフ形石器である。２はやはり保田層産珪質頁岩の剥片である。背面には各方向からの剥離面が交叉し、リッジを除去する制御用剥片の剥離に後続する工程で生産されたことが分かる。１、２は後期旧石器時代の遺物であるとみられる。３は黒曜石製の剥片に加工した削器である。器面の風化から、本例も後期旧石器時代の遺物とも判断できるが、断定はできない。４は砂岩製の石器断片である。５及び６は石核Ｂ（ピエス・エスキェ）である。５は中生代珪質頁岩、６はチャートを素材としている。７はチャート製の剥片である。

このほかに、礫の小破片が11点ある。調査区内に散在する状況である。石材は流紋岩質溶結凝灰岩が２点ある以外は、砂岩である。被熱による破砕片が多い。

第４章　まとめ

出口・鐘塚遺跡の主要部分は昭和 61 年度に発掘され、すでに報告書も刊行されている。
今回報告する出口・鐘塚（２）・（３）・（４）遺跡のエリアからは、後期旧石器時代の遺物集中か所が７か所、縄文時代の陥穴、近世の溝などが発見された。まとめとして、後期旧石器時代の石器群について触れておきたい。

集中１は、非常に狭い範囲に有溝砥石を含む６点の遺物が集中していた。有溝砥石に関しては、本文に詳しい観察結果を記述した。県内では、まず市原市草刈六之台遺跡で発見され（島立 1994)、千葉市白鳥台遺跡の例が追加され（古内 1984)、次いで成田市天神峰最上遺跡から海岸礫製の例が発見された（永塚 2001)。石質や研磨面構成に共通性がある。

集中５及び集中６からはややまとまった量の石器が出土した。初めてこれらの石器群を見たときには、非常に小型の剥片が多くあり、かなり消耗した石核から剥離された剥片類であるという印象を受けた。特に、使われている石材が良質な黒曜石や、矢子層産珪質頁岩であることから、遠隔地から搬入された石材の最終的な消費形態であるように思われた。これらの石材は石刃素材として多く用いられていたという一般的な認識があり、細かな剥片が注意されることはなかったことも、こうした認識を誘導したのであった。

しかし、実態はそのようなものではなかった。集中５では、遺存した剥片 17 点の内半数以上の 64％が道具として使われている。集中６でも 20 点の剥片の約半数 45％は道具であった。しかも、道具として使われた剥片のサイズは非常に小さく、長さは 20mm 前後のものが多い。細部加工のある剥片の最小のものでは僅かに長さ 11.8mm、幅 7.0mm である。その調整技術もニブリングによるものが大半であり、こうした微小石器が日常的に使用されていたことは大きな驚きであった。さらに、微小インパクト・ダメージの確認によって、その一部が投射具の先端部チップである可能性も想定された。従来、このような微小石器（nanolithic）は断片的にしか認識されておらず、今回注意された意義は大きい。。

このような微小石器のブランクはどのようなものであったのだろう。また、ブランク生産はいかなる方法によって行われているのであろう。残念なことに、本遺跡では微小石器とそのブランクの生産過程を提示するための材料が不足している。本遺跡とほぼ同じ時代に形成された市原押沼第２遺跡第３文化層（田島 2010）では、小型剥片を生産するために、４種類の方法が使われている。押沼第２遺跡第３文化層には多数の石刃が含まれるが、石刃にはさまざまな変異が確認され、それに対応する生産手法が想定されている（石材消費戦略については田村 2013 参照)。微小石器のブランク生産には４種ある。

（１）石刃生産技法Ｂによる小石刃及び制御用石刃を素材とする小石刃や剥片を素材とするもの。石刃生産技法Ｂとは、石刃を横に割って、割った面を打面として側縁から小石刃を生産するものである。これには制御用の厚みのある石刃や剥片が使われることが多くある。

（２）石核を製作する際に生じる剥片類を石核に転化するもの。特に、原石分割段階の礫面付き大型剥片が石核ブランクに選択されることが多い。

（３）不整な角礫を剥片製ブランク生産用の石核とするもの。図の２点は保田層産の珪質頁岩を素材とし、縦横にジョイント面が交錯するため、素材は不整なジョイント面を留めるブロックに分割される。このブロックが石核ブランクとして使用される。

（4）石核Ｂによる両極剥片を素材とするもの。東北アジアでは、石核Ｂは細石刃核として機能することが多く、わが国も例外とはいえない。

以上、４種のブランク生産が想定される。これ以外に、石刃生産に関わる消耗した石核やブロック状の石核片などをブランクにする場合が想定され、これを仮想類（５）としておく。本遺跡の微小石器の場合、良質な黒曜石や矢子層産珪質頁岩が素材となっていることから、（１）や（２）が該当する可能性がある。

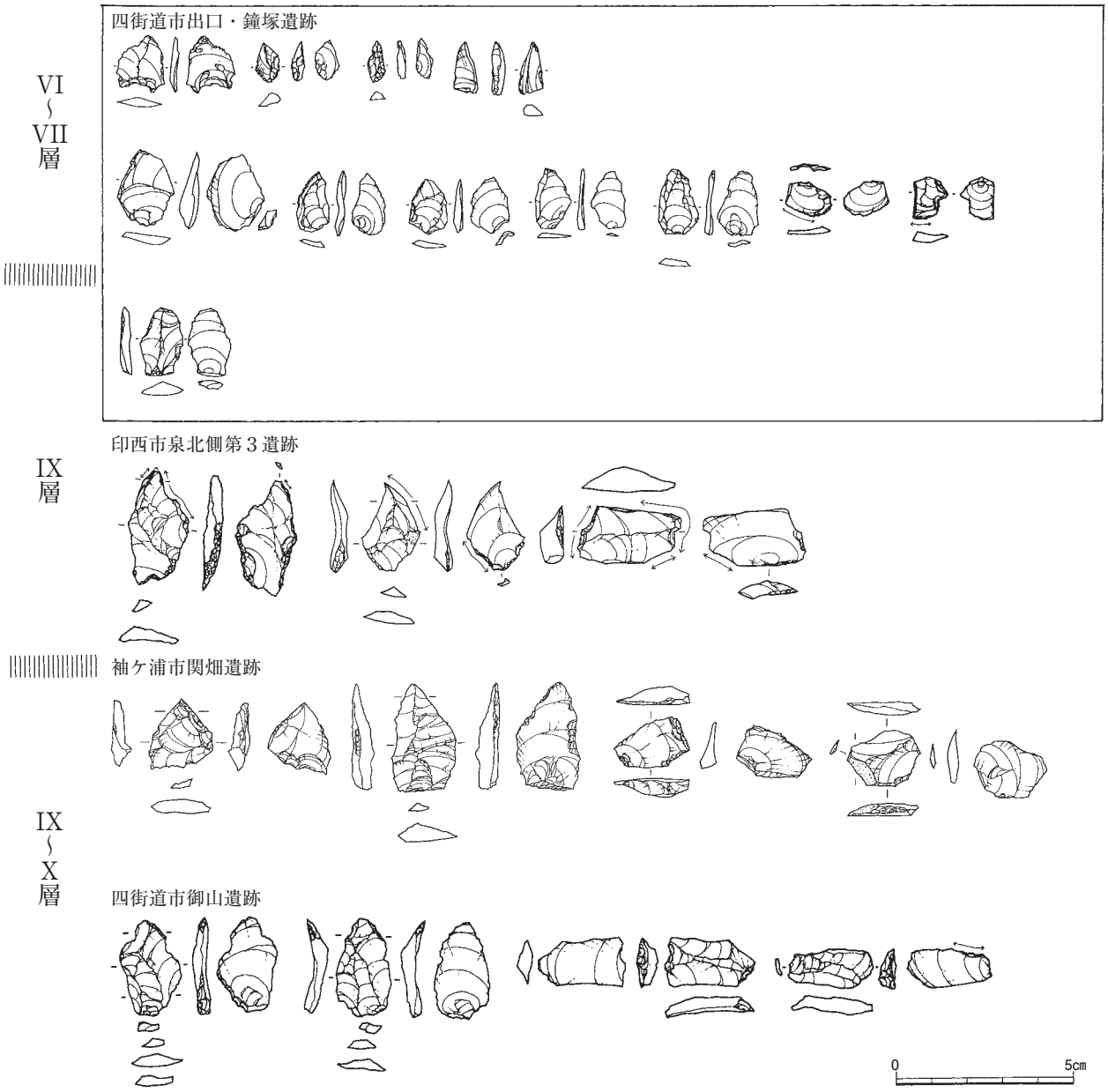
微小石器が作られ、使われた背景として、遠隔地石材の欠乏を想定されてきた。長距離移動に伴う石材補給に関する理論的なモデルによれば、石器石材の管理は、石材の運用面の方法（個別的な備給戦略）と、移動過程での特定地点での石材補充（場所的な備給戦略）によって支えられている。このモデルによれば、移動頻度が高く、かつ移動距離が長距離に傾くと、石器石材は移動集団によって拐帯され、逐次消費されることになる。このため、石器群は石器石材の運用のされ方に強く影響される。ここでは石器のリサイクルやリダクションが一般化する。これを吝嗇家的な石材利用という。一方、居住地移動が一定のキャッチメント･エリア内に収束する場合、石器石材にはエリア内の場所で採集される石材が卓越するようになり、石材消費は浪費家的になる。

ここで集中５と集中６に立ち返ってみよう。ここでは、石器群の大半が、きわめて遠隔地でしか採れない石材によって構成されている。集中５では脊梁山地を越えて、米沢盆地南縁部にまで採石行は及んでいる。集中６の黒曜石原産地は推定の域を出ないが、原石は、筑摩高地の、当時にあっては森林限界にまで踏み込まねば入手できなかった。これらの原石の管理は、備給理論が推定するように、個別的な備給戦略に委ねられることになる。

微小石器群が形成された理由として、個別的な備給を想定することはあり得ることである。ところで、個別的な備給を可能にしたテクノロジーとはいかなるものであったのか。まず思い当たるのは、その小ささは明らかに着柄を前提としているということである。世界先史学では、着柄・植刃を前提とした微小石器を細石器（microlith）という（雨宮･上田 2000　この論文では細石器の遡行性が的確に予測されている。なお、研究草創期の（芹沢 1956）では、①細石刃（矢出川）、②剥片製小型石器（曽根）、③幾何形細石器（井島）の三者を総括して、日本の microlith を定義している）。細石刃のみを細石器とみなす狭隘な立場は日本国内でしか通用しない。従って、以下、微小石器を世界的な基準に準拠して細石器と呼ぶことにしよう。少なくとも、集中５や集中６の時代には細石器化が促進されていた。それは個別的な備給戦略と関係していると考えられるが、その起源はどのように考えられるだろう。

今のところ、わが国でもっとも古い細石器石器群は、出口・鐘塚遺跡の東北１km 弱のところにある御山遺跡第Ⅱ文化層から出土している（矢本 1994）。石器群の産出層準は第２黒色帯とＸ層との境界付近、あるいはその直下とされ、後期旧石器時代前半期初頭に置かれる（時期区分は田村 2015）。ユーラシア西部上部旧石器時代の開始は細石器石器群の出現によって画されるといわれているが、わが国をはじめとする東アジアにおける後期旧石器時代の始まりも、剥片製細石器の出現と軌を一にしていることになる。後期旧石器時代の出現は、石刃技法ばかりではなく、細石器の組織的導入によっても定義される。

御山遺跡第Ⅱ文化層の細石器に関しては、かつて端部整形石器という分類範疇を設定した。小型サイコロ状石核から得られる貝殻状剥片を素材とし、先細りの剥片から端部整形尖頭器が、長円形の剥片からは端部整形刃器が生産される。この時期の類例は、袖ケ浦市関畑遺跡第Ⅰ文化層（新田 2004）にある。後続する第２黒色帯中部の例としては酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡でいわゆる台形石器と共伴する事例が報告さ



第 21 図　剥片製小型石器の系統

れている（新田 2005）。出口・鐘塚（１）遺跡にもある（岡田 1999）。また、この時期の石核Ｂ（ピエス・エスキェ）への依存度の急激な高まりは、とりもなおさず小石刃様剥片の量産体制の確立を意味し、細石器石器群の定着・多様化の過程と理解することができる。

出口・鐘塚遺跡の細石器石器群は、墨古沢南遺跡例に後続するものであり、剥片製細石器という一系統に帰属する事例である可能性が高い（第 21 図）。この段階には、すでに石刃を斜断するトランケーションによるナイフ形石器が作られており、非常に複雑化した狩猟・加工技術体系が生活を支えていた。これに関しては、すでに弓矢猟とダーツによる投げ槍猟の併存を指摘したことがある。仮に、このような機能差が想定できるならば、先に触れた両極的な石材消費戦略とともに、狩猟対象や狩猟環境に対応した狩猟具の機能的な違いというシナリオも必要になる。いずれにせよ、今後の検討課題は膨大である。

引用・参考文献

雨宮瑞生・上田　耕　2000 「細石器としての南九州ナイフ形石器」『ミューゼアム知覧紀要』第６号　１～９頁

岡田誠造　1999 『四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』（財）千葉県文化財センター

島立　桂　1994 『千原台ニュータウンⅣ－市原市草刈六之台遺跡－』（財）千葉県文化財センター

芹沢長介　1956 「日本に於ける無土器文化」『人類学雑誌』64-3　31-43 頁

田島　新　2010 『千原台ニュータウンＸＸⅡ－市原市押沼第２遺跡（下層）・川焼台遺跡（下層）－』（財）千葉県教育振興財団

田村　隆　2013 「総括」『谷津貝塚埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』国際文化財株式会社　181 ～ 191 頁

田村　隆　2015 「まれびとの訪い－日本列島石刃石器群の成立－」『考古学研究』61-4、24 ～ 44 頁

永塚俊司　2001 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－天神峰最上遺跡（空港№ 64 遺跡）－』（財）千葉県文化財センター

新田浩三　2004 『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財発掘調査報告書 13 －袖ケ浦市関畑遺跡－』（財）千葉県文化財センター

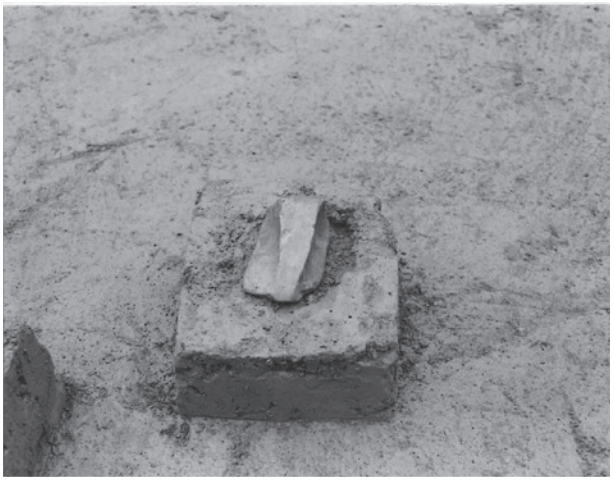
新田浩三　2005 『東関東自動車道水戸線酒々井 PA 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡－』（財）千葉県文化財センター

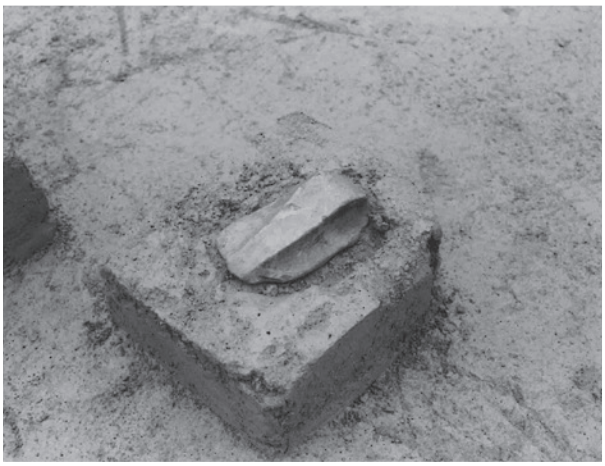
古内　茂　1984 『千葉東南部ニュータウン 15 －馬の口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－』（財）千葉県文化財センター

矢本節朗　1994 『四街道市御山遺跡（１）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』（財）千葉県文化財センター

写　真　図　版

集中１遺物出土状況


集中１有溝砥石出土状況（１）


集中１有溝砥石出土状況（２）

集中２遺物出土状況

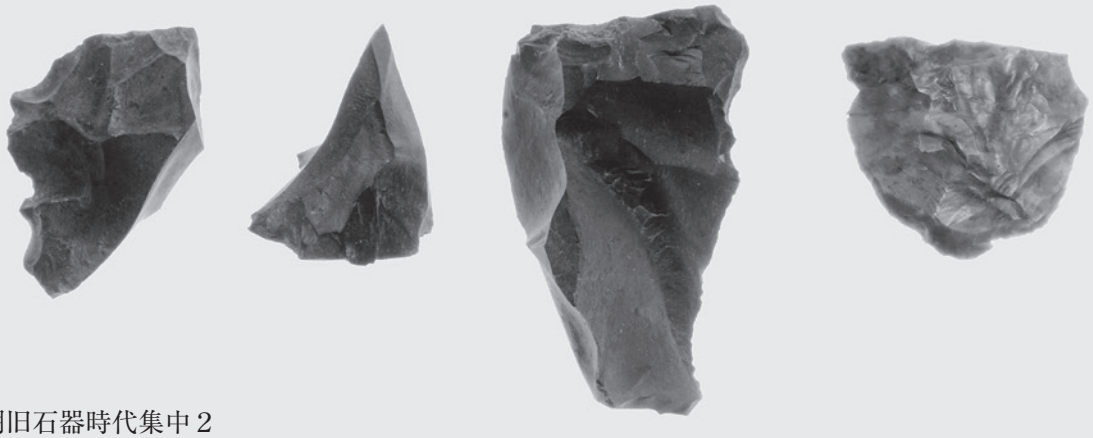
集中３・集中５遺物出土状況

集中６遺物出土状況

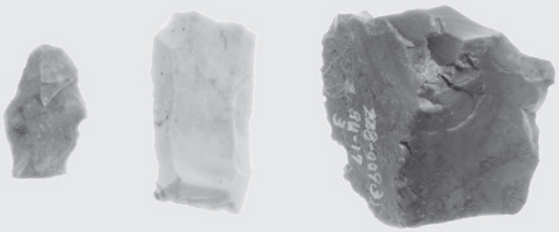
SK-001

図版 2

後期旧石器時代集中 1

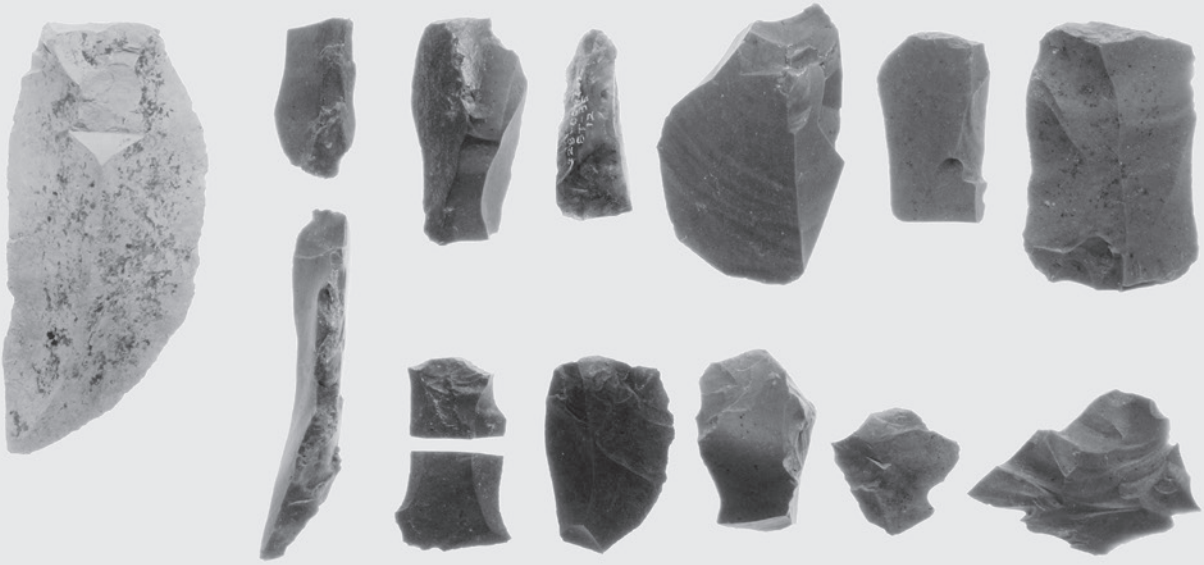


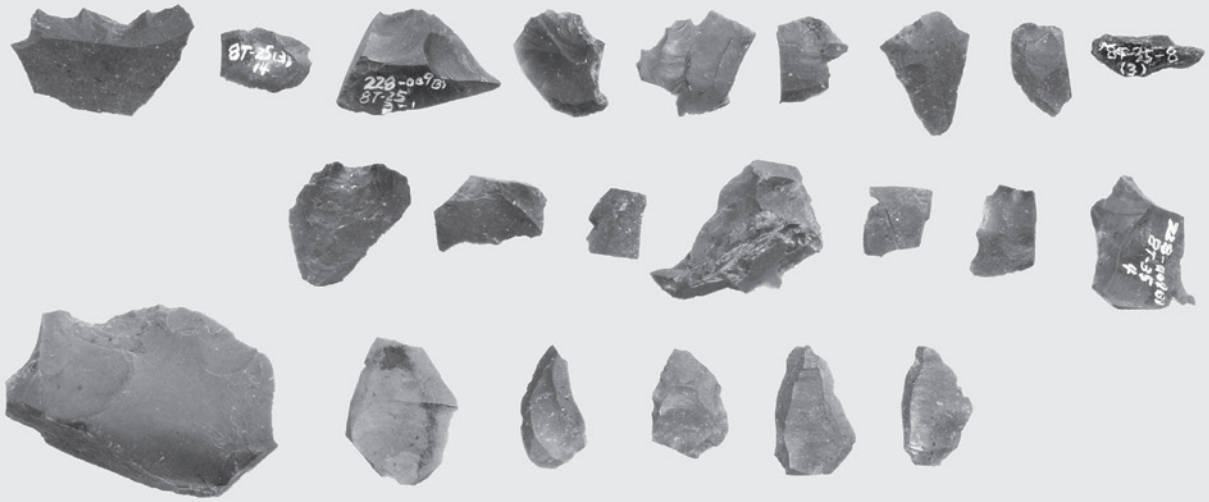
後期旧石器時代集中 2



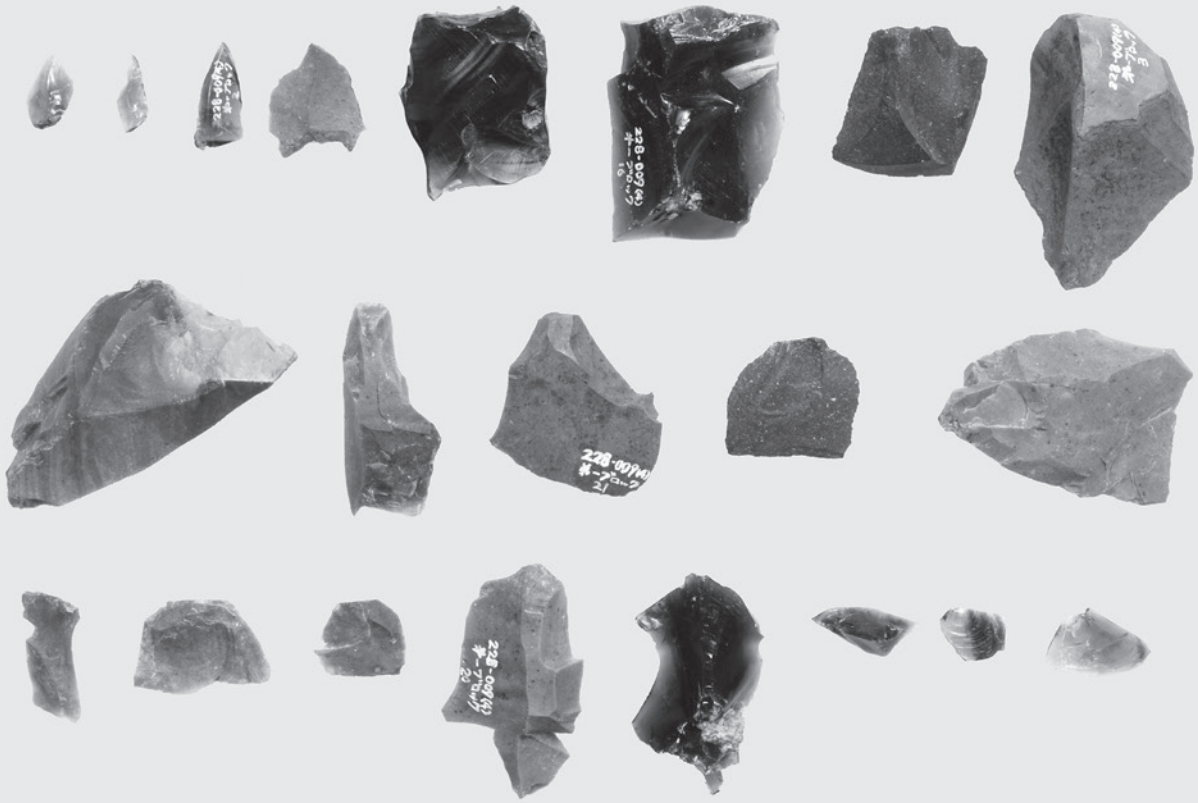
後期旧石器時代集中 3

後期旧石器時代集中 4　　後期旧石器時代集中 5

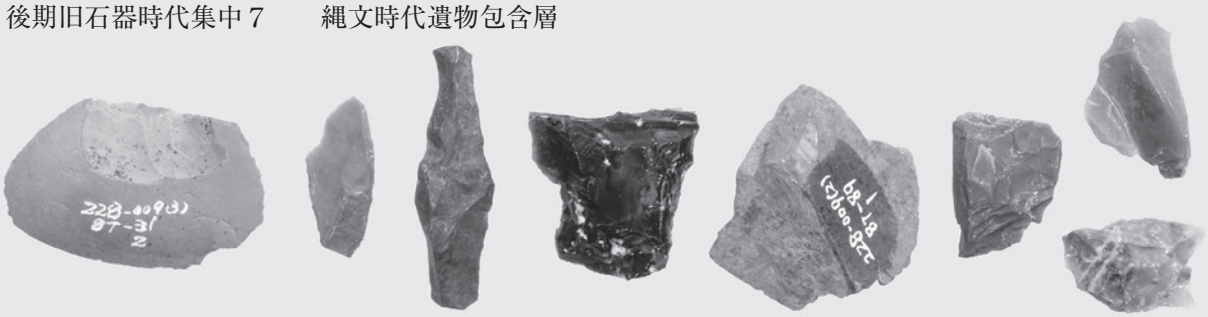




後期旧石器時代集中 6

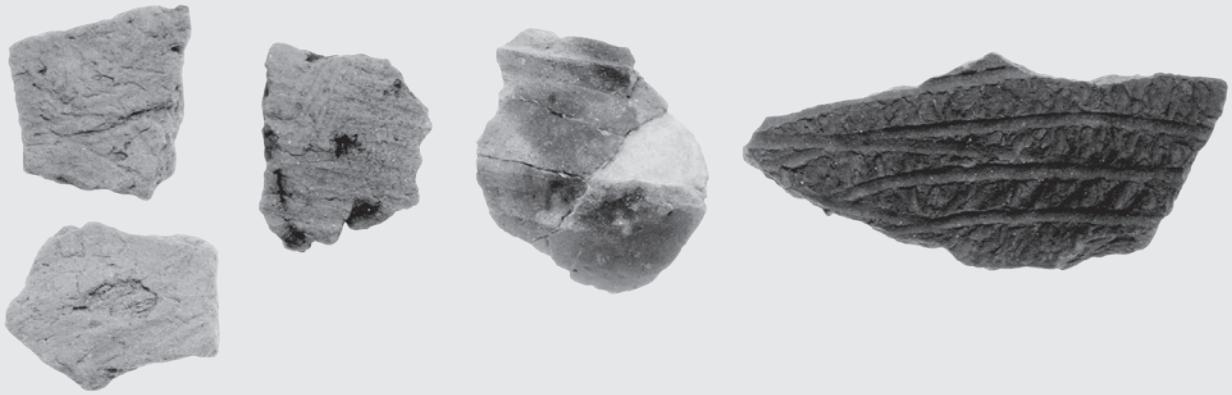


後期旧石器時代集中 7　　縄文時代遺物包含層



後期旧石器時代集中１有溝砥石

縄文土器



報告書抄録

ふ り が な	よつかいどうしでぐちかねづか（２）・（３）・（４）いせき
書　　名	四街道市出口・鐘塚（２）・（３）・（４）遺跡
副 書 名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	ⅩⅧ
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第743集
編 著 者 名	田村　隆
編 集 機 関	公益財団法人　千葉県教育振興財団文化財センター
所　在　地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　TEL043-422-8811
発行年月日	西暦　　2015年　10月　27日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コ ー ド 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
出口（でぐち）・鐘塚（かねづか）（２）・（３）・（４）遺跡（いせき）	千葉県（ちばけん）四街道（よつかいどう）市（し）長岡字（ながおかあざ）鐘塚（かねづか）	228	089	35度41分10秒	140度11分07秒	20090202～20100830	2,051㎡	独立行政法人都市再生機構物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出口・鐘塚（２）・（３）・（４）遺跡	包蔵地	旧石器時代	遺物集中地点７か所	石器・礫	第２黒色帯下部から有溝砥石が出土した。
	包蔵地	縄文時代	陥穴１基、遺物包含層１か所	縄文土器、石器、礫	

要　約	後期旧石器時代の大規模な遺物集中地点が発見された出口・鐘塚（１）遺跡の東側に所在する。後期旧石器時代の小規模な遺物集中地点が７か所発見された。そのうち１か所からは、砂岩製の有溝砥石が出土した。また、第２黒色帯上部の遺物集中地点からは、非常に小型の石器が複数出土し、その機能や編年的な位置付けに新たな知見を提供した。

千葉県教育振興財団調査報告第 743 集

四街道市出口・鐘塚（2）・（3）・（4）遺跡

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ－

平成 27 年 10 月 27 日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　独立行政法人　都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿６－５－１

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の２

印　刷　株式会社　エリート情報社［印刷出版局］
成田市東和田 415 － 10